東京地方裁判所部長
法學士 立石謙輔君講述

裁判所構成法講義

完

明治大學出版部發行

明治大學圖書部
寄贈本

44.12.25

裁判所構成法講義目次

丁數

緒言……一

第一編　裁判所及檢事局……二

第一章　總則……二

第一節　裁判所ノ範圍……二

第二節　裁判所ノ種類……六

第三節　檢事局ノ意義……九

第四節　檢事ノ職務……一一

第二章　裁判所ノ構成……一一

第一節　裁判所ノ組織……一三

第一款　第一意義ニ於ケル裁判所ノ組織……一三

第二款　第二意義ニ於ケル裁判所ノ組織……一三
第一項　判事……一四
第二項　書記課……二二
第三項　執達吏……二三
第四項　廷丁……二五
第三款　檢事局……二五
第四款　第三意義ニ於ケル裁判所ノ組織……三〇
第一項　區裁判所……三一
第二項　地方裁判所……三四
第三項　控訴院……三七
第四項　大審院……三八
第三章　裁判所ノ管轄……四一
第一節　事物ノ管轄……四二
第一款　民事訴訟ニ付キ……四二
第二款　刑事訴訟ニ付キ……四五
第二節　土地ノ管轄……四七
第一款　民事々件ノ土地管轄(即チ裁判籍)……四九
第一項　普通裁判籍……四九
第二項　特別裁判籍……五二
第二款　刑事訴訟ノ土地管轄……五六
第三節　管轄ノ指定……五九
第四節　管轄ノ移轉……六三
第一款　民事管轄ノ移轉—合意管轄……六三
第二款　刑事訴訟ノ管轄ノ移轉……六七
第五節　檢事局ノ管轄……六九
第二編　裁判所及檢事局ノ官吏其他ノ吏員ノ資格及ヒ任免……六九

第一章　判事及ヒ檢事……七〇
第二章　裁判所書記……八七
第三章　執達吏……八八
第四章　廷丁……九一
第三編　司法事務ノ取扱……九一
第一章　開廷……九二
第二章　裁判所ノ用語……九八
第三章　裁判ノ評議及言渡……一〇〇
第四章　裁判所及ヒ檢事局ノ事務章程……一〇五
第五章　司法年度及ヒ休暇……一〇五
第六章　法律上ノ共助……一〇八
第四編　司法行政ノ職務及監督……一一〇

裁判所構成法講義目次

裁判所構成法

東京地方裁判所部長
法學士　立石謙輔君講述

緒言

大日本帝國憲法第一條ニ曰ク「大日本帝國ハ萬世一系ノ天皇之ヲ統治ス」同第五十七條ニ曰ク「司法權ハ天皇ノ名ニ於テ法律ニ依リ裁判所之ヲ行フ」裁判所ノ構成ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム」ト即チ司法權ハ天皇統治權ノ一部ニ屬スト雖モ特ニ憲法上裁判所ナル獨立ノ機關ヲ設ケ絶對ニ他ノ關渉ヲ排斥シテ公平無私ノ裁判ヲ爲サシメ以テ臣民ノ信頼ヲ厚フシ其堵ニ安ンセシメンコトヲ希圖ス爰ニ於テカ司法權ノ活用ニ付テ一定ノ準則ナカルヘカラス之ヲ訴訟法トス裁判所ハ法律即チ訴訟法ノ定ムル所ニ從ヒ天皇ノ名ニ於テ公平無私ノ裁斷ヲ爲スヲ掌ル天皇ノ憲法上ノ機關ナリ從テ其機關ノ構成モ亦一定ノ準則ニ基カサル可カラス之レ憲法カ

特ニ裁判所ノ構成ハ法律ヲ以テ之ヲ定ムト宣言スル所以ナリ

憲法カ宣言スル所ニ基キ裁判所ノ構成ヲ定ムル現行法律ハ明治二十三年二月八日法律第六號裁判所構成法即チ之ナリ

裁判所構成法ハ百四十四ケ條ヨリ成リ之ヲ四編ニ分チ第一編ヲ裁判所及檢事局ト爲シ裁判所及檢事局ノ組織、裁判所ノ權限等ヲ規定シ第二編ヲ裁判所及檢事局ノ官吏ト爲シ其任用ニ必要ナル資格ヲ規定シ第三編ヲ司法事務ノ取扱ト爲シ開廷、裁判所ノ用語、裁判ノ評議及言渡、司法年度及休暇等ニ關スル事項ヲ規定シ第四編ヲ司法行政ノ職務及監督權ト爲シ其事項ニ關シ規定ス

第一編　裁判所及檢事局

第一章　總則

第一節　裁判所ノ範圍

裁判所ナル語ヲ廣義ニ解スレハ通常司法裁判所ハ勿論特別司法裁判所モ亦之ヲ包含ス通常司法裁判所ハ裁判所構成法ノ規定スル裁判所ニシテ憲法第六十條ニハ「特別裁判所ノ管轄ニ屬スヘキモノハ別ニ法律ヲ以テ之ヲ定ム」ト規定シ裁判所構成法第二條ニモ亦同一趣旨ノ規定アリ

特別裁判所ハ土地ノ狀況、訴訟事件ノ性質等ニ依リ普通裁判所ノ審判ニ適セサル場合ニ於テ特ニ其審判ヲ爲サシムルヲ目的トス今左ニ現行法制上特別裁判所ト名ツクヘキモノ數種ヲ列記シ諸君ノ參考ニ供セン

(一)陸軍軍法會議

明治二十一年法律第二號陸軍治罪法ヲ以テ之ヲ規定ス

(二)海軍軍法會議

明治二十二年法律第五號海軍治罪法ヲ以テ之ヲ規定ス

(三)臺灣總督府法院

明治三十一年臺灣總督府律令第十六號臺灣總督府法院條例ヲ以テ之ヲ規定シ臺灣及澎湖島ノ民事刑事ノ事件ヲ審判ス之ヲ地方法院、覆審法院ノ二トス

(四)農商務省特許局

明治四十二年法律第十六號特許法ヲ以テ之ヲ規定シ特許權ニ關スル爭訟ヲ審判ス

(五)所謂治外法權ヲ有スル國ノ帝國領事廳
明治三十二年法律第七十號領事官ノ職務ニ關スル法律ヲ以テ之ヲ定メ在外國帝國臣民ノ民事刑事ノ事件ヲ審判ス

(六)違警罪即決
明治十八年第三十一號布告違警罪即決例ヲ以テ警察署長分署長又ハ其代理タル官吏ヲシテ違警罪ヲ即決セシム(裁判所構成法施行條例第九條、刑法施行法第二十八條第三十一條參照)

(七)集治監囚人犯罪裁判
明治十五年布告第十六號集治監囚人犯罪裁判管轄及ヒ明治十八年布告第四十二號ヲ以テ司獄官吏ヲシテ便宜裁判ヲ爲サシム(裁判所構成法施行條例第十四條參照)

(八)戰時裁判
明治十五年布告第三十六號戒嚴令ニ依リ合圍地境內ニ於テハ軍事ニ係ル民事及特種ノ刑事事件ハ之ヲ軍衙ニ於テ裁判セシム(同令第十一條參照)

(九)朝鮮總督府裁判所
明治四十二年勅令第二百三十六號統監府裁判所令、同年勅令第二百三十七號統監府裁判所司法事務取扱令、明治四十三年勅令第三百十九號朝鮮總督府設置ニ關スル件

(十)關東都督府法院
明治三十九年勅令第百九十八號

特別裁判所ノ外尙行政裁判所、權限爭議裁判所モ亦廣義ノ裁判所中ニ包含セラルト雖モ裁判所構成法ニ所謂通常裁判所トハ民事刑事ニ關スル爭訟ヲ裁判スル司法裁判所中ヨリ特別裁判所ヲ除外シタル最狹義ノ司法裁判所トス單ニ司法裁判所ト謂フトキハ特別司法裁判所ヲモ包含スルコトハ裁判所構成法第二條ニ通常裁判所ニ於テハ民事刑事ヲ裁判スルモノトス但シ法律ヲ以テ特別裁判所ノ管轄ニ屬セシメタルモノハ此ノ限ニ在ラスト規定スルニ依リ明カニシテ裁判所構成法カ司法裁判所中通常裁判所ニノミ關スル事項ヲ規定スルモノナルコトモ亦同條ニヨリ明ナリト謂フヘシ以下本講義中單ニ裁判所ト稱スルハ此意義ニ於ケル最狹義ノ司法裁判所(即チ裁判所構成法ニ所謂通常裁判所)ノミヲ指スモノトス

第二節　裁判所ノ種類

裁判所ハ民事刑事ヲ裁判スルモノトス民事及刑事ノ意義如何ハ之ヲ訴訟法ノ說明ニ讓リ爰ニハ單ニ裁判所構成法ニ定メタル通常司法裁判所ノ種類ヲ述フルニ止メントス

構成法第一條ニ曰ク左ノ裁判所ヲ通常裁判所トス

第一　區裁判所
第二　地方裁判所
第三　控訴院
第四　大審院

ト即チ構成法ニ於ケル裁判所ハ右四種アルノミ裁判所ハ民事刑事全般ノ事項ヲ審判スルヲ以テ其職責トスル憲法上ノ國家機關ニシテ其事項タルヤ種類甚タ多ク其數ニ於テモ亦甚タ莫大ナルノミナラス其事項ノ發生スル地域亦狹少ナラサルヲ以テ先ツ事件ノ性質ニ依リ之ヲ區裁判所ト地方裁判所トニ分屬セシメ區裁判所ヲシテ輕易ニシテ且ツ迅速ヲ要スル性質アリト認メタル事件ヲ審判セシメ地方裁判所ヲシテ其他一切ノ事件ヲ審判セシムルヲ原則トシ只特ニ重大ナリト認メタル事件ハ其例外トシテ控訴院又ハ大審院ヲ以テ專屬裁判所ト爲スコトヽセリ（構成法第三八條第五〇條）

裁判所ハ又之ヲ第一審裁判所、第二審裁判所（或ハ控訴裁判所）第三審裁判所（或ハ上告裁判所）ノ三種ニ區別スルコトヲ得即チ區裁判所及ヒ地方裁判所ハ普通之ヲ第一審裁判所トシ控訴院ヲ第二審裁判所、大審院ヲ第三審裁判所ト稱スルヲ得ヘシ然レトモ之レ只其取扱フ處ノ事件ノ關係上大體ニ於テ區別シ得ルニ過キスシテ裁判所自體ノ區別ナリト謂フ能ハス何トナレハ地方裁判所ハ區裁判所ノ所屬事件ニ對シテハ第二審裁判所ニシテ其他ノ事件ニ對シテハ第一審裁判所タルヲ原則トシ控訴院ハ地方裁判所ノ第一審事件ニ對シテハ第二審裁判所ナリト雖モ區裁判所ノ事件ニ對シテハ第三審即チ上告裁判所ナリ而シテ又タ特別重大ナル事件ニ對シテハ自ラ第一審裁判所タルト同時ニ第二審裁判所タルコトアリ（構成法第三八條）大審院ハ第三審裁判所タルヲ原則トスレトモ區裁判所ノ所屬事件ニ對シテハ全ク無關係ニシテ一方ニ於テハ特別重大ナル事件ニ對シ第一審裁判所タルコトアル（構成法第五〇條第二項）カ故ナリ今左ニ以上說明スル所ヲ明カナラシ

ムル爲メ表ヲ作リテ之レヲ示サン

事件	第一審裁判所	第二審裁判所	第三審裁判所
簡易迅速事件ニ付キ	區裁判所	地方裁判所	控訴院
原則トシテ	地方裁判所	控訴院	大審院
構成法第三八條事件ニ付キ	東京控訴院	東京控訴院	大審院
構成法第五〇條第二號事件ニ付キ	此場合ニハ大審院ハ第一審且ツ終審トシテ審判ヲ爲スヘキカ故ニ一般ニ認メタル三審制度ノ例外ヲ爲スモノナリ		

右表示スル處ニヨリ明ナルカ如ク我裁判制度ハ三審級タルヲ原則トシ由テ以テ事實ノ認定法則ノ適用ニ付キ誤ナカラシメ公正ヲ維持シ臣民ヲシテ裁判ニ信賴セシムルヲ得セシメントセリ

三審制ノ利害ニ關シテハ議論アリ徒ラニ時日ヲ遷延シ遂ニ事實ノ眞相ヲ混亂セシメ狡猾ニシテ善人ヲ假裝スル兇惡ノ徒ヲ法網ヨリ逸シ去ラシムルノ嫌ナキニ非ラス

裁判所ヲ分チテ合議裁判所ト單獨裁判所ノ二種ト爲スコトヲ得

一、合議裁判所ハ三人(地方裁判所)五人(控訴院)若クハ七人(大審院)ノ判事ヲ以テ組織スル部ニ於テ事件ヲ審理シ其評議ヲ經テ裁判ヲ爲スヲ原則トスル裁判所ヲ謂ヒ(構成法第三條)

二、單獨裁判所ハ單獨ノ判事ヲ以テ事件ヲ審判セシムル裁判所ヲ謂フ區裁判所ハ即チ單獨裁判所ニシテ其他ハ皆合議裁判所ナリ

右ノ外尙裁判所ヲ事實審理裁判所ト法律審理裁判所トニ區別スルヲ得第三審裁判所ハ上告審トシテ常ニ法律點ノミニ付キ裁判スルヲ以テ其本務ト爲スヲ以テ之ヲ第一第二審裁判所ト區別シテ法律審理ノ裁判所ト稱スルヲ得此點ニ付テハ民事刑事訴訟法中上告ニ關スル規定ヲ參照セヨ

第三節　檢事局ノ意義

各裁判所ニ檢事局ヲ附置ス檢事局ニハ一人若クハ數人ノ相應ナル員數ノ檢事ヲ置ク檢事ハ裁判所ニ對シ獨立シテ其事務ヲ行フモノナルカ故ニ檢事局ハ裁判所ニ對シ獨立ノ官廳ナリト謂ハサルヲ得ス檢事ハ通常裁判所ニ公訴ヲ提起スル國

家ノ官職ニシテ公訴ハ其種類ヲ異ニスルニ依リ或ハ區裁判所ニ或ハ地方裁判所ニ或ハ大審院ニ提起スルコトアリ又公訴ノ取扱上必要ナル手續ヲ爲シ法律ノ正當ナル適用ヲ請求シ刑事裁判ノ適當ニ執行セラルヽヤヲ監視スル職責ヲ有スルノミナラス尙其他

(一)民事々件ニ於テモ必要ナリト認ムルトキハ通知ヲ求メ又ハ裁判所ノ法律ニ基ク通知ニ依リ法廷ニ立會又ハ立會ハスシテ其意見ヲ述フルコトヲ得ヘク

(二)裁判所ニ屬シ又ハ之レニ關係スル司法及行政事件ニ付キ公益ノ代表者トシテ法律上其職權ニ屬スル監督事務ヲ行フ

者ナルカ故ニ各裁判所ニハ必ス檢事局ヲ附置スルノ必要ヲ生ス

檢事ハ單獨ノ官府ニシテ合議制ノモノニ非ラス檢事局ト檢事トノ關係ハ恰モ區裁判所ト其單獨判事トノ關係ニ等シク外部ニ對シテハ職權ノ主體ハ常ニ單獨ノ檢事ナリトス然レトモ各裁判所ニ附置セラレタル檢事局ト檢事局トノ相互ノ關係ハ其內部ニ於テハ常ニ相離ルヘカラサル關係ヲ有シ寧ロ相合シテ一體ヲ成スモノト謂フヲ適當トス即チ檢事局ハ全國各裁判所ニ附置セラレタル各檢事局ヲ合シテ一團トシテ存在シ其長官ヲ檢事總長トス之レ即チ檢事同一體ノ原則アル所以ナリ(以上構成法第六條第七條參照)

第四節　檢事ノ職務

檢事ノ職務ハ構成法第六條ニ其大要ヲ規定スルノミ蓋シ裁判所構成法ニ於テ其詳細ヲ規定スルノ必要ナケレハナリ從テ本講義ニ於テモ亦其詳細ヲ說明セス只左ニ其主ナルモノヲ列記スルニ止メン

一、公訴ヲ提起スルコト
二、公訴ヲ實行スルコト
三、犯罪ニ關スル搜査ヲ爲スコト
四、公益ノ代表者トシテ上告、再審、非常上告ヲ爲スコト
五、判決其他ノ裁判竝ニ勾引狀、勾留狀等ノ執行ヲ指揮監督スルコト
六、其他前節ニ記載シタル職務ヲ行フコト

第二章　裁判所ノ構成

裁判所ナル語ニハ三樣ノ意義アリ

一ハ裁判所ナル官署ヲ意味ス即チ判事、檢事、書記其他一切ノ署員ヲ以テ組織スル官署ノ意義ニ用ヰラレ檢事局ハ勿論書記課並ニ區裁判所ニ於ケル登記所執達吏等ヲ包含スル行政上ノ意義ヲ有スルモノト解シ得ヘシ

二ハ憲法上ニ謂フ所ノ司法權ヲ行フ機關ヲ意味シ裁判所構成法第四條ニ裁判所ノ設立廢止及管轄區域云々ト云ヒ第五條ニ各裁判所ニ相當ナル員數ノ判事ヲ置クト云ヒ第六條ニ各裁判所ニ檢事局ヲ附置ス云々ト云ヒ第八條ニ各裁判所ニ書記課ヲ設クト云ヒ第九條ニ區裁判所ニ執達吏ヲ置クト云フカ如キ又第一編裁判所及檢事局ト云ヒ第二章區裁判所第三章地方裁判所第四章控訴院第五章大審院ト云フ如キハ即チ此意義ヲ有ス

三ハ事件ニ付キ外部ニ對シ司法權行動ノ作用ヲ爲ス裁判所ノ部局ヲ意味シ合議裁判所ニ於ケル三人、五人又ハ七人ヨリ組織セル部、單獨裁判所ニ於ケル單獨判事即チ此意義ニ於ケル裁判所ナリ裁判所構成法第百三條ニ開廷ハ裁判所又ハ支部ニ於テ之レヲ爲スト云フ場合ニ於ケル裁判所ハ第一ノ意義ヲ有スルニ反シ第百四條ニ訴訟審問ノ上席及指揮ハ合議裁判所云々ト云ヘル裁判所ハ第二ノ意義ヲ有シ第百五條ニ裁判所ニ於テ對審ノ公開ヲ停ムル決議ヲ爲シタルトキ云々ト云フ場合第百十九條ニ合議裁判所ノ裁判ト云ヘル場合ニ於ケル裁判所其他訴訟上ノ意義ニ於ケル裁判所ハ常ニ第三ノ意義ヲ有スルモノト解セサルヘカラス

第一節　裁判所ノ組織

第一款　第一意義ニ於ケル裁判所ノ組織

此意義ニ於ケル裁判所ヲ組織スルモノ左ノ如シ

一、第二義ニ於ケル裁判所

二、檢事局

第二款　第二意義ニ於ケル裁判所ノ組織

此意義ニ於ケル裁判所ヲ組織スルモノハ

一、判事

二、裁判所書記

三、執達吏　（但シ區裁判所ニ屬ス）

四、廷丁

即チ之ナリ或ハ辯護士カ訴訟審理上缺クヘカラサル場合アルヲ理由トシ裁判所構成ノ一分子ナリト說明スル者アレトモ辯護士カ訴訟上必要ナルハ訴訟上當事者又ハ被告ヲ必要トスルト同一意義ニ解シテ可ナルノミナラス辯護士ハ如何ナル意義ニ於テスルモ裁判所所屬ノ吏員(又ハ公務員)ニアラサルヲ以テ之ヲ裁判所ノ構成員ト解スルハ否ナリ

第一項　判事

構成法第五條ニ曰ク裁判所ニ相應ナル員數ノ判事ヲ置クト

現行ノ規定ニ依レハ裁判所ハ大審院一、之ヲ東京ニ設立シ控訴院七、之ヲ東京、大阪名古屋、廣島、長崎、宮城、函館ノ各所ニ設置シ地方裁判所五十、區裁判所三百二十一之ヲ各地方ニ分配設置ス

全國判事ノ定數ヲ千二百二十三人トシ大審院各控訴院各地方裁判所ニ院長又ハ所長一人ヲ置ク今左ニ各裁判所ニ配置セラルヽ判事ノ定數ヲ表示セン

裁判所ノ種別	院長又ハ所長部長	判事	裁判所ノ數	判事總數
大審院	院長 一人	三人	二十五人	一
控訴院	院長 七人	二十一人	百十人	七
地方裁判所	所長 五十人	七十人	二百九十三人	五十
區裁判所	二人以上ノ判事ヲ置キタル時ハ其一人ヲ監督判事トス	○	六百四十三人	三百二十一
				千二百二十三人

(明治三二年勅令第百五十三號、三五年勅令第九十三號、三八年勅令第十一號、第二百三號、四〇年勅令第七十九號、二三年法律第六十二號、四〇年法律第二十八號參照)

判事ハ勅任又ハ奏任トシ其任官ヲ終身トス(構成法第六十七條)

大審院長ハ勅任判事中ヨリ天皇之ヲ補シ各控訴院長及大審院部長ハ司法大臣ノ上奏ニヨリ勅任判事中ヨリ之ヲ補ス其他ノ判事ノ職ハ司法大臣之ヲ補ス(構成法第六十八條)

各地方裁判所ニハ各地方裁判所長一人ヲ置キ其裁判所ニ屬スル一般ノ事務ヲ指揮シ其行政事務ヲ監督セシム(構成法第二十條第一、二項)

又各地方裁判所ニハ一若クハ二以上ノ民事部及刑事部ヲ設ケ各部ニ部長ヲ置キ其部ノ事務ヲ監督シ其事務ノ分配ヲ定メシム(構成法第十九條第二十條第三項)

司法大臣ハ毎年各地方裁判所ノ判事一人若クハ二人以上ニ其裁判所ノ裁判權ニ屬スル刑事ノ豫審ヲ爲スコトヲ命ス(構成法第二十一條)之ヲ豫審判事ト稱ス

各地方裁判所ノ事務ハ司法大臣所定ノ通則ニ從ヒ各部及各豫審判事ニ之ヲ分配スヘク各地方裁判所ノ各部長及部員ノ配置及所長部長部員差支アルトキノ代理モ亦毎年豫メ之ヲ定ムルモノニシテ此等ノ事項ニ付テハ裁判所長部長及ヒ部ノ上席判事一人ノ列席シタル會議ニ於テ裁判所長會長トナリ多數決ヲ以テ之ヲ定ムヘク若シ可否同數ナルトキハ會長之ヲ決ス(構成法第二十二條第一、二項)

裁判所長ハ刑事部又ハ民事部ノ中何レカヽ部長タルヘキモノニシテ何レノ部ノ部長タルヘキヤハ自ラ之ヲ指定スルモノトス(構成法第二十二條第三項)

以上説ク處ニ從ヒ事務ノ分配及ヒ判事ノ配置一度定マルト雖モ時ニ或ハ一部ノ事務多キニ過クルコトアリ或ハ判事轉退シ又ハ疾病其他ノ事故ニ因リ久シク闕勤スル者アル等久シキニ亘リテ差支ヲ生スルコトナキニ非ス斯ノ如キ場合ニ於テハ特ニ臨時會議ヲ開キ一度定メタル事務ノ分配又ハ判事ノ配置ヲ變更スルコトヲ得ルノミナラス裁判所ノ事務其現在ノ部數ニ對シ多キニ過クル場合ニ於テ司法大臣適宜ト認ムルトキハ新タニ一部又ハ數部ヲ設クルコトヲ得サルニ非ラサレトモ之レ一ノ變例ニ屬シ一司法年度中ハ之ヲ變更セサルヲ以テ原則トス(構成法第二十四條)而シテ若シ判事中一時差支ノ爲メ或事件ヲ取扱フコトヲ得サル者ヲ生シ(例ヘハ短期間ノ疾病ニ罹リ又ハ忌避同避等ノ原因ニヨリ事務ヲ取扱フ能ハサルコトアリ)タルトキハ豫メ定メタル代理順序ニ依リ其代理ヲ爲スヲ本則トスレトモ其代理タルヘキ判事ニ於テモ亦同樣ノ差支アル爲メ其事務ヲ執ル能ハサルコトアリ多數ノ判事同時ニ差支ヲ生シタル爲メ遂ニ代理タル判事無キニ立至ルコト有リ如斯ノ場合ニ於テ若シ其事件緊急ナリト認ムルトキハ裁判所長ニ於テ其管轄區域内ノ區裁判所判事又ハ豫備判事ニ其代理ヲ命スルコトヲ得(構成法第二十五條)

司法大臣ハ地方裁判所ト其ノ管轄區域内ノ區裁判所ト遠隔ナルカ若クハ交通不便ナルカ爲メ必要ナリト認ムルトキハ其地方裁判所ニ屬スル民事及刑事ノ事務ノ一部分ヲ取扱フカ爲メ一若クハ二以上ノ支部ノ設置ヲ命スルコトヲ得而シテ如斯ノ場合ニ於テハ同時ニ其支部ヲ開クヘキ區裁判所ヲ指定スヘキモノトス即チ支部ハ區裁判所ニ於テ地方裁判所ノ民事刑事ノ裁判事務ノ一部ヲ處理スル合議裁判ノ機關ニシテ支部ヲ組織スル判事ハ通常支部ヲ設置シタル區裁判所若シクハ近隣ノ區裁判所ノ判事ヲ以テ之ニ充テ司法大臣ニ於テ其選任ヲ行フモノト

シ尙司法大臣ハ支部ニ勤ムヘキ豫審判事ヲ命スルヲ得ヘク其豫審判事ハ支部ニ對シ本部ノ關係ヲ有スル地方裁判所ノ管轄區域內ノ區裁判所判事ニ之ヲ命スルコトヲ得ルモノトス(構成法第三十一條第一、二、三、四項)

支部ニ於ケル判事ノ代理ニ關シテハ前揭構成法第二十五條ノ規定ヲ適用ス(構成法第三十一條第五項)

區裁判所ハ各判事單獨ニ司法事務ヲ取扱ヒ各區裁判所ニハ一人若クハ二人以上ノ判事ヲ置ク二人以上ノ判事ヲ置キタルトキハ司法大臣所定ノ通則ニ從ヒ其裁判事務ヲ各判事ニ分配處理セシムヘク其分配ハ毎年地方裁判所長豫メ之ヲ定ム又二人以上ノ判事ヲ置キタルトキハ司法大臣ハ其一人ヲ以テ監督判事トシ之ニ行政事務ヲ行ハシム(一人ノミノ判事ヲ置キタルトキハ其判事ハ當然ニ監督判事ト同一ノ行政事務ヲ行フモノトス)

區裁判所ニ於テモ事務分配一度定マリタルトキハ司法年度中之ヲ變更セサルヲ原則トスレトモ一人ノ判事ノ分擔多キニ過キ又ハ判事轉退シ又ハ疾病其他ノ事由ニ因リ久シキニ亘リ闕勤スル者アル等引續キ差支ヲ生シタルトキハ之ヲ變更スルコトヲ得而シテ判事ノ一時差支アル爲メノ代理順序ハ毎年其區裁判所ヲ管轄スル地方裁判所長豫メ之ヲ定メ置クヘク監督判事ノ差支アルトキハ官等ノ順序ニ從ヒ其職務ヲ代理スルモノトス又一個ノ區裁判所ニ於テ法律上ノ理由(忌避同避ノ如キ)又ハ特別ノ事情(例ヘハ疾病死亡其他天災等ノ爲メ)ニ因リ事務ヲ取扱フ判事缺亡スルトキハ其區裁判所ニ代リ他ノ區裁判所ヲシテ事務ヲ取扱ハシムルモノトシ其代理ノ順序モ亦毎年豫メ地方裁判所長ニ於テ之ヲ指定シ置クモノトス(構成法第十二條第十三條)

各控訴院ニハ各控訴院長一人ヲ置キ其控訴院ニ屬スル一般ノ事務ヲ指揮シ其行政事務ヲ監督セシム(構成法第三十五條第一、二項)

又各控訴院ニハ一若クハ二以上ノ民事部及刑事部ヲ設ケ各部ニ部長ヲ置キ其部ノ事務ヲ監督シ其事務ノ分配ヲ定メシムルコト地方裁判所ト同樣(構成法第三十四條第二項第三十五條第二項)ニシテ控訴院ノ事務分配幷ニ判事ノ代理ニ付テハ大體ニ於テ地方裁判所ト異ルコトナク唯特ニ左ノ數點ヲ注意スルヲ以テ足レリトス(構成法第三十六條)

一、構成法第二十二條第二十五條ヲ以テ地方裁判所長ニ與ヘタル權限ト同等ノ權限ハ控訴院長ニモ亦與ヘラレタルモノトス

二、控訴院ノ判事差支ノ爲メ或事件ヲ取扱フコトヲ得ス且同院ノ判事中其代理ヲ爲シ得ヘキ者ナキ場合ニ於テ其事件緊急ナリト認ムルトキハ控訴院長ハ其控訴院所在地ノ地方裁判所長ニ通知シテ其地方裁判所ヨリ代理スヘキ判事ヲ出サシメ以テ之ニ代理ヲ命スルコトヲ得但シ如斯場合ニ於テハ豫備判事ヲ以テ其代理ヲ爲サシムルヲ得サルモノトス

大審院ニ大審院長ヲ置キ大審院ニ屬スル一般ノ事務ヲ指揮シ其行政事務ヲ監督セシム又大審院ニ一若クハ二以上ノ民事部及刑事部ヲ設ケ各部ニ部長ヲ置キ其部ノ事務ヲ監督シ其事務ノ分配ヲ定メシム(構成法第四十三條第四十四條)

大審院ノ事務ノ分配幷ニ判事代理順序ハ毎年大審院長部長ト協議シ豫メ之ヲ定ムヘク且次年度ニ於テ自ラ部長タルヘキ部ヲ指定ス

大審院ノ判事差支ノ爲メ或ル事件ヲ取扱フコトヲ得ス且同院ノ判事中其代理ヲ爲シ得ヘキ者ナキ場合ニ於テ其事件緊急ナリト認ムルトキハ大審院長ヨリ大審院所在地ノ控訴院長(東京控訴院長)ニ通知シ其控訴院ヨリ代理スヘキ判事ヲ出サシメ之ニ代理ヲ命スルコトヲ得

大審院長ハ隨時部長若シクハ部員ハ承諾アルトキハ之ヲ他ノ部ニ轉セシムルコトヲ得而シテ右部長又ハ部員ノ變更ヲ生シタル場合(即チ部ノ組立ノ變更)ニ於テ大審院長便利ナリト認ムルトキハ既ニ變更前或部ニ於テ着手シタル事務ニシテ終決ニ至ラサルモノハ變更後ニ於テモ特ニ變更前ノ組立ヲ以テ引續キ其事務ヲ結了セシムルコトヲ得ヘク又司法年度中事務ノ分配ノ變更ニ付テハ構成法第二十四條ノ規定ヲ適用スルモノトス(以上構成法第四十五條乃至第四十七條)

司法大臣ハ闕位アルマテ新任ノ判事ヲ豫備判事トシ之ニ司法省又ハ區裁判所又ハ地方裁判所ニ於テ勤務スルコトヲ命スルコトヲ得(構成法第六十三條)區裁判所又ハ地方裁判所ニ於テ勤務スル豫備判事ハ判事差支アリテ職務ニ從事スルコトヲ得ス且通常代理ノ規定ニ依リ難キコト有ルトキ司法大臣ニ於テ之ニ判事ヲ代理セシムルコトヲ得ヘク又區裁判所若クハ地方裁判所ノ判事ニ一時闕位アル間司法大臣ハ一時豫備判事ヲ以テ之ヲ充タスコトヲ得但シ如斯場合ニ於テ同時ニ二人ノ豫備判事ヲ同一部ニ屬セシムルコトヲ許サヽルモノトス

帝國大學法科大學卒業生幷ニ判檢事登用試驗ヲ受ケテ及第シタル者ハ試補トシテ採用セラルヽヲ得而シテ試補ハ三年間(明治三十八年法律第三十二號ニヨリ其ルコトヲ得ルモノトス)裁判所及檢事局ニ於テ實地修習ヲ爲スヲ必要トシ一年間以上修習ヲ

爲シタル試補ハ其修習ヲ現ニ監督スル判事ノ命アルトキ區裁判所ニ於テ或司法事務ヲ取扱フコトヲ得ヘク又豫審判事及地方裁判所ノ受命判事モ亦其附屬ノ試補ヲシテ自己ニ代リ事務ヲ取扱ハシムルコトヲ得(構成法第六十條第六十一條)

第二項　書記課

各裁判所ニ書記課ヲ設ク(構成法第八條)書記課ハ往復會計記錄其他此法律又ハ他ノ法律ニ特定シタル事務ヲ行フモノニシテ各裁判所ノ書記課ニハ相應ナル員數ノ裁判所書記ヲ置キ右事務ヲ行ハシムルモノトシ區裁判所ノ各判事及合議裁判所ノ各部ニハ少クトモ各一名ノ書記ヲ專屬セシムルヲ必要トス(構成法第八十五條)ルカ故ニ書記ノ定數ハ區裁判所ニ於テハ判事ノ數合議裁判所ニ於テハ其部ノ數ヲ下ル能ハス(構成法第八十五條)

現行ノ制度ニヨレハ全國裁判所書記ノ定數ヲ四千六百二十四人トシ其俸給豫算定額内ニ於テ各裁判所及檢事局ノ間ニ彼此增減スルコトヲ得ルモノトス(明治二十六年十月勅令第百七十七號裁判所書記長書記定員及俸給令發布ノ後數次ノ改正ヲ經テ明治三十九年勅令第八十五號ヲ以テ更ニ改正セラレタルモノニ依ル)

大審院及各控訴院ノ書記課ニハ書記長各一人ヲ置キ地方裁判所及二人以上ノ書記ヲ置キタル區裁判所幷ニ檢事局ノ書記課ニハ監督書記各一人ヲ置ク而シテ書記長及監督書記ハ各々其上官ノ命令ニ服從シ書記課ノ事務ヲ指揮監督スルモノトシ書記ハ其上官ノ命令ニ從ヒ法令ニヨリ定マリタル職務ノ範圍内ニ於テ分配セラレタル事務ヲ取扱フモノナリ然レトモ若シ其取扱ニ係ル或事項カ事務分配上他ノ書記ニ屬シタリトノ理由ヲ以テ其效力ノ無效ヲ主張スルヲ得サルモノトス(構成法第八十七條)

書記長ハ奏任トシ書記ハ之ヲ判任トス構成法第八十八條ニ「書記ハ司法大臣之ヲ任シ及ヒ之ヲ補ス、書記長ハ奏任トス、書記長ノ職ハ司法大臣之ヲ補ストアルニ基クモノナリ」

書記ニ任セラレタル者闕位ナキ間ハ豫備書記ニ補ス豫備書記ハ書記トシテ臨時勤務ヲ命セラルヽコトアリ而シテ其事務ノ取扱ニ於テハ書記ト同シモノトス」

試補モ亦書記ノ事務ヲ臨時取扱ハシメラルヽコトアリ即チ合議裁判所長又ハ區裁判所ノ判事若クハ監督判事ハ其裁判所ニ於テ修習中ノ試補ニ其取扱ヲ命スルコトヲ得而シテ試補ハ右取扱ニ係ル書記トシテノ職務上署名ヲ要スルトキハ特別ノ許可ヲ得テ署名スル旨ヲ附記スルヲ必要トス(構成法第九十二條)

第三項　執達吏

各裁判所ニ相應ナル員數ノ執達吏ヲ置ク執達吏ハ裁判所ノ發スル文書ヲ送達シ及ヒ裁判所ノ裁判ヲ執行スル機關ニシテ此法律又ハ他ノ法律(訴訟法其他特別法令)ニ定メタル特別ノ職務ヲ行フモノトス(構成法第九條第九十四條)

執達吏ハ司法大臣之ヲ任補スルヲ原則トシ控訴院長ニ其管轄區域內ノ裁判所ノ執達吏ヲ任補スル權ヲ委付スルコトヲ得(構成法第九十五條)

執達吏ハ其所屬裁判所ノ上官ノ命ヲ受ケタル書記及其裁判所ヲ管轄スル地方裁判所ノ上官ノ命令ニ從ヒ其所屬區裁判所ヲ管轄スル地方裁判所ノ管轄區域內ノ何レノ場所ニ於テモ其職務ヲ行フモノニシテ裁判所ヨリ發スル文書ニシテ送達ヲ要スルモノハ特別ノ場合ノ外執達吏ヲシテ送達セシムルモノトス(構成法第九十八條)

然レトモ書記ヨリ直接ニ若ハ郵便ヲ以テ送達スルコトヲ法律ノ許シタル場合ハ此限リニ在ラス又執達吏ハ刑事ニ付キ警察官ヲ以テ執行ヲ爲サシムル場合ノ外ハ裁判所ノ裁判ヲ執行スルモノニシテ其權限ハ訴訟法又ハ特別法ノ定ムル所ニ依ルモノトス(明治二十三年法律第五十一號執達吏規則參照)

執達吏ハ刑法第七條ニ所謂公務員ノ一種ナリ而シテ其職務ヲ適實ニ行フ爲メ豫メ保證金(五百圓以下ニ於テ控訴院長之ヲ定ム)ヲ納ムルヲ必要トスルト同時ニ其職務ニ付テハ法定ノ手數料ヲ受クルヲ得ルモノナリ但シ其受クル所ノ手數料カ一定ノ額(年收百八十圓)ニ達セサルトキ(即チ收入少ナキトキ)ハ其不足額ニ付キ國庫ヨリ補助金ヲ受クルモノトス(構成法第九十六條第八十八條)

尙執達吏ノ職務細則幷ニ保證金ニ關スル規則ハ司法大臣之ヲ定ム(明治二十三年司法省令第二號執達吏登用規則第二十三條第二十四條同年法律第五十二號執達吏手數料規則參照)

第四項　廷丁

廷丁ハ開廷ニ際リ當事者證人其他ノ訴訟關係人ヲ出廷セシメ其他司法大臣所定ノ規則ニ定ムル所ノ事務ヲ取扱フ者ニシテ大審院控訴院及地方裁判所ニ於テハ院長又ハ地方裁判所長(構成法ニ單ニ裁判所長控訴院長地方裁判所長トアルハ大審院長ヲ總稱ス)之ヲ雇入レ又ハ其雇ヲ解キ區裁判所ニ於テハ地方裁判所長之ヲ雇入及ヒ解雇ノ任ニ當ルモノトス

區裁判所カ執達吏ヲ用ユルコト能ハサルトキ其裁判所所在地ニ於テ書類ヲ送達スル爲メ廷丁ヲシテ其任ニ當ラシムルヲ得(以上構成法第百一條及第百二條)

第三款　檢事局

各裁判所ニ檢事局ヲ附置ス檢事局ニハ相應ナル員數ノ檢事ヲ置ク大審院檢事局ニハ檢事總長一人各控訴院檢事局ニハ檢事長各一人各地方裁判所檢事局ニハ各檢事正一人ヲ置キ各檢事局ノ事務ヲ分配指揮監督セシム但シ檢事局ハ其內部ニ於テハ相合シテ同一體ヲ成スモノニシテ各檢事局相對立シテ獨立スルモノニアラス此點ニ於テ檢事局ハ裁判所ト全ク其性質ヲ異ニシ一ツノ行政官府タルニ過キス其最上ノ長官ハ司法大臣ニシテ各裁判所ニ附置セラレタル檢事局ハ司法大臣ニ從屬シ檢事總長ヲ以テ其首長ト爲シタル包括的ノ檢事局ト稱スル一個ノ行政官府ノ各一部分タルニ過キサルナリ從テ檢事ハ常ニ其上官ノ命令ニ從フヘク又檢事總長、檢事長、檢事正ハ其管轄區域內ノ裁判所檢事局ニ於ケル檢事ノ職務ニ在ル事務ヲ自ラ取扱フ權ヲ有シ又其管內ニ於テ或檢事ノ取扱フヘキモノトシテ分配シタル事務ヲ隨時他ノ檢事ニ移ス權ヲ存ス)構成法第八十二條第八十三條第十八條、第三十三條、第四十二條、第五十六條)

現行ノ制度ニ依レハ檢事總長一人檢事長七人檢事正四十九人之ヲ各裁判所ニ於ケル檢事局ニ配置シ其局內ノ檢事ノ長官タラシム而シテ檢事總定員ハ右記載シタル者ヲ除キテ三百二十九人トス

檢事ハ勅任又ハ奏任トシ檢事總長及檢事長ノ職ハ司法大臣ノ上奏ニ因リ勅任檢事中ヨリ之ヲ補シ他ノ檢事ノ職ハ司法大臣之ヲ補ス

各裁判所ニ附置セラレタル檢事局ノ管轄區域ハ其附置セラレタル裁判所ノ管轄區域ニ同シキヲ以テ後ニ裁判所ノ管轄ニ付キ說明スル所ヲ參照スヘシ(構成法第六條第三項)

檢事ハ如何ナル方法ヲ以テスルモ判事ノ裁判事務ニ干涉シ又ハ裁判事務ヲ取扱フコトヲ得サルト同時ニ裁判所ニ對シテハ獨立シテ其事務ヲ行フモノニシテ檢事局內部ニ於テハ上官ニ對スル被監督者ノ地位ニ立チ種々ノ拘束ヲ受クルコト有ルヘシト雖モ其拘束カ外部ニ對シテ直接ニ效果ヲ生スルコトナク法令ニ基キ各檢事ノ爲シタル事務ハ外部ニ對シテハ常ニ完全ナル效力ヲ生ス

豫備檢事ニ付テハ豫備判事ニ付キ說明シタル所ヲ參照スヘシ(構成法第六十三條第六十四條)

檢事局ニ於テハ一人ノ檢事若ハ數人ノ檢事悉ク差支アリテ或事件ヲ取扱フコトヲ得サルトキハ裁判所長(又ハ區裁判所ニ於テハ判事若シクハ監督判事)ハ其事件猶豫スヘカラサルモノト認ムルトキハ判事ニ檢事ノ代理ヲ命シ其事件ヲ取扱ハ

シムルヲ得(構成法第六條第四項)又區裁判所檢事局ノ檢事ノ事務ハ其他ノ警察官憲兵將校下士又ハ林務官之ヲ取扱フコトヲ得ヘク司法大臣ハ適當ナル場合ニ於テハ區裁判所判事、試補又ハ郡市町村ノ長ヲシテ檢事ヲ代理セシムルコトヲ得(構成法第十八條(現今區裁判所ニ於テハ試補ヲシテ檢事々務ヲ執ラシムルコト少カラス之ヲ檢事代理ト稱ス))

裁判所ニ附置セラレタル檢事局ニ於テ往復會計記錄其他法令ニ定メタル事務ヲ取扱フ爲メ必要ナリト認ムルトキハ書記課ヲ設クルコトヲ得但シ區裁判所ノ檢事局ニハ書記課ヲ設クルヲ得スト雖モ右同樣ノ事務ヲ取扱ハシムル爲メ書記ヲ勤務セシムルハ妨ナシ(構成法第八條)

檢事局ニ於ケル書記課幷ニ書記ニ付テハ裁判所ニ於ケル書記課幷ニ書記ニ關スル說明ヲ參照スヘシ

司法警察官ハ檢事ノ補助者トシテ犯罪ノ證憑ヲ蒐集シ犯人ヲ搜査シ檢事ヲシテ迅速機敏ノ措置ヲ爲スヲ得シメ又不當ノ公訴ヲ提起スル勿ラシムルニ付テ缺ク可カラサル機關ナリ檢事ニシテ司法警察官ニ竢ツ勿ランカ犯罪ノ認知並ニ公訴提起ハ殆ント不可能ト謂フモ過言ニ非ス司法警察官ヲ檢事局員トシ檢事ニ從屬セシメ行政警察官ト全ク別異ノ制度ヲ設クヘキヤ否ヤハ之ヲ別問題トシ現行ノ制度ニ因レハ司法警察官ハ同時ニ行政警察官ナリト雖モ苟モ司法警察官タル職ヲ帶フル以上ハ充分ニ檢事ノ補助機關タル其職責ヲ完フスルコトヲ勉メサルヘカラス檢事ニ於テ司法警察官ニ對スル懲戒權ヲ有セサルヲ見テ直ニ其職責ヲ怠ルカ如キコト有ル可カラス

司法警察官ハ檢事ノ補助機關ニシテ檢事ノ職務上其檢事局管轄區域內ニ於テ發シタル命令及其檢事ノ上官ノ發シタル命令ニ服從スルモノニシテ司法省又ハ檢事局及內務省又ハ地方官廳ハ協議シテ警察官中各裁判所ノ管轄區域內ニ於テ司法警察官トシテ勤務シ檢事ノ命令ヲ受ケ之ヲ執行スル者ヲ定ム(構成法第八十四條)從テ又檢事ハ司法警察官ニ對シ訓令ヲ發シ又ハ諭告ヲ爲スコトヲ得

刑事訴訟法第四十七條ニ依レハ

第一、警視、警部長、警部、警部補

第二、憲兵將校、下士

第三、島司

第四、郡長

第五、林務官

第六、市町村長

ヲ以テ總テ檢事ノ補佐トシテ其指揮ヲ受ケ司法警察官トシテ犯罪ヲ搜査ス可キモノトシ尙警視總監及地方長官(東京府知事ヲ除ク)ハ各其管轄地內ニ於テ司法警察官トシテ犯罪ヲ搜査スルノ任ニ當ルモノトス但シ警視總監及地方長官ハ其搜査ニ關シ地方裁判所檢事ト同一ノ權ヲ有スト規定スル結果同一事項ニ付キ下級ノ司法警察官ニ對スル命令二途ニ出ツルノ弊害ナキ能ハス

尙ホ船長ハ海船內ニ於ケル司法警察ノ事務ヲ取扱フコトアリ又稅務官カ犯則事件ノ搜査ヲ爲スコトアリト雖モ此等ハ何レモ司法警察官ナリト謂フ能ハス

司法警察官ハ檢事局員ニハ非ラサレトモ司法警察官トシテ檢事ノ命令ニ服從スルヲ必要トスルカ故ニ(警視總監及地方長官ハ除外ス)特ニ其大要ヲ爰ニ說述シタルニ止ル詳細ハ刑事訴訟法又ハ警察法學ニ於テ研究スヘキ事項ニ屬ス

第四款　第三意義ニ於ケル裁判所ノ組織

構成法第十一條第一項ニ曰ク區裁判所ノ裁判權ハ單獨判事之ヲ行フ同法第三條ニ曰ク地方裁判所控訴院及大審院ヲ合議裁判所トシ數人ノ判事ヲ以テ組立テタル部ニ於テ總テノ事件ヲ審問裁判スト即チ區裁判所ノ單獨判事合議裁判所ノ部ハ之ヲ第三意義ニ於ケル裁判所トス(事件ノ審判中檢事及ヒ書記ノ立會ヲ必要トスルハ此等ノ者カ裁判所ノ構成員ナルカ爲メニアラス單ニ訴訟手續上其立會ヲ必要トスルニ過キサルコト獨ホ重罪事件ニ辯護人ノ出廷ヲ必要トスルト異ナルコトナシ)

各區裁判所ノ單獨判事又ハ各合議裁判所ノ部カ裁判權ヲ行フハ即チ其所屬裁判所ヲ代表シテ之ヲ爲スモノニシテ其單獨判事又ハ部ノ權限ハ即チ其所屬裁判所ノ權限ニシテ單獨判事又ハ部ノ審理裁判ハ即チ其所屬裁判所ノ審判ナリ

第一項　區裁判所

區裁判所ノ裁判權ハ單獨判事之ヲ行フ其取扱フヘキ事件左ノ如シ

甲　民事訴訟ニ於テ左ノ事項ニ付キ裁判權ヲ有ス但シ反訴ニ關シテハ民事訴訟法ノ定ムル所ニ依ル(構成法第十四條)

(一)二百圓ヲ超過セサル金額又ハ價額二百圓ヲ超過セサル物ニ關ル請求

(二)價額ニ拘ラス左ノ訴訟

(イ)住家及其他ノ建物又ハ其或部分ノ受取明渡使用占據若ハ修繕ニ關リ、又ハ賃借人ノ家具若ハ所持品ヲ賃貸人ノ差押ヘタルコトニ關リ……賃貸人ト賃借人トノ間ニ起リタル訴訟

(ロ)不動產ノ經界ノミニ關ル訴訟

(ハ)占有ノミニ關ル訴訟

(ニ)雇期限一年以下ノ契約ニ關リ雇主ト雇人トノ間ニ起リタル訴訟

(ホ)賄料又ハ宿料又ハ旅人ノ運送料又ハ之ニ伴フ手荷物ノ運送料、旅店若クハ飲食店ノ主人又ハ運送人ニ旅人ヨリ保護ノ爲メ預ケタル手荷物金錢又ハ有價物――ニ付キ(一)旅人ト旅店若シクハ飲食店ノ主人トノ間ニ(二)又ハ旅人ト水陸運送人トノ間ニ起リタル訴訟

乙　非訟事件ニ付キ法律ニ定メタル範圍及方法ニ從ヒ左ノ事務ヲ取扱フノ權ヲ有ス(構成法第十五條)

(一)未成年者、瘋癲者、白痴者、失踪者其他法律若ハ判決ニ因リ治産ノ禁ヲ受ケタル者ノ後見人若ハ管財人ヲ監督スルコト

(二)不動産及船舶ニ關ル權利關係ヲ登記スルコト

(三)商業登記及特許局ニ登錄シタル特許意匠及商標ノ登記ヲ爲スコト

丙　刑事ニ付キ左ノ事項ニ付裁判權ヲ有ス但シ(二)以下ニ記載シタル罪ハ豫審ヲ經サルモノニ限ル(構成法第十六條ノ一)

(一)拘留又ハ科料ニ該ル罪(但シ二個以上ノ主刑中其一個ヲ科スヘキ罪ニシテ拘留又ハ科料ノ刑ニ該ラサルモノアルトキハ此限ニ在ラス)

(二)竊盜ノ罪(刑法第二百三十五條)

(三)竊盜及刑法第二百五十四條ノ罪ノ贓物ニ關スル罪(刑法第二百五十六條(但シ詐欺取財罪等ノ贓物ニ關スル罪ニ付テハ營利ヲ有セサルモノトス))

(四)刑法第百三十條(住居ヲ侵ス罪)第百七十五條(猥褻ノ文書圖畫等ノ發賣頒布又ハ公然陳列罪)第百八十五條乃至第百八十七條(賭博及富籤ニ關スル罪)及第二百九條(過失傷害罪)ノ罪並ニ第百三十條ノ未遂罪(刑法第百三十二條)

(五)一年以下ノ懲役若ハ禁錮又ハ三百圓ヲ超過セサル罰金ニ該ル罪(刑法第九十七條、第百六條、第三號、第百十條、第二項、第百十六條、第百二十二條、第百二十三條、第百八十八條、第百九十二條、第百九十三條、第二百六條、第二百八條、第二百十二條、第二百十七條、第二百二十二條、第二百五十二條、第二百六十三條等)

此場合ニ於テハ累犯又ハ併合罪ト・シテ處分スヘキ場合ト雖モ區裁判所其裁判權ヲ有ス(構成法第十六條ノ二)又タ二個以上ノ主刑中其ノ一個ヲ科スヘキ罪ニシテ其刑一年以上ノ懲役若ハ禁錮又ハ三百圓ヲ超過スル罰金ニ該ルモノアルトキハ區裁判所其裁判權ヲ有セス(刑法第百十八條第百二十四條第百三十條等)

丁　以上甲乙丙ニ掲ケタルモノヲ除ク外訴訟法又ハ特別法ニ於テ定メタルモノ（例ヘハ戸籍法第五條ニ定ムル所ニ從ヒ戸籍及身分登記ニ關スル事務ヲ監督スルカ如シ）

戊　他ノ裁判所ノ囑託ニ基ク共助（構成法第百三十一條尙共助ノコトハ後ニ説明ス）

第二項　地方裁判所

地方裁判所ニ於テ訴訟法ニ依リ法廷ニ於テ審問裁判スヘキ事件ハ三人ノ判事ヲ以テ組立テタル部ニ於テ之ヲ審問裁判ス其判事中一人ヲ裁判長トス但シ豫備判事ハ如何ナル事情アルモ二人以上其部ニ列席スルヲ許サヽルモノトス

裁判長ハ通常部長其任ニ當ルモノトス然レトモ部長差支アリテ法廷ニ列席スル能ハサルトキハ上席部員代リテ裁判長トナリ事件ヲ審判ス部長ハ行政ノ意義ニ於ケル裁判所ノ地位ニシテ裁判長ハ司法上ノ意義ニ於ケル地位ナリ故ニ部長其部ニ列席セサルトキハ其部ノ審判シタル事件ニ對シ干渉ヲ試ムルハ違法ナリ唯タ其部ノ事務分配等ハ常ニ部長ニ屬ス

司法事務中訴訟法又ハ特別法ノ定ムル所ニ從ヒ判事一人ニテ之ヲ取扱フ場合ヲ認ム如斯場合ニ於テハ其判事ハ即チ其裁判所ヲ代表ス換言スレハ其判事即チ裁判所ナリ豫審判事ハ即チ其一ナリ地方裁判所ノ取扱フヘキ事件左ノ如シ

甲　民事訴訟ニ於テ左ノ事項ニ付キ裁判權ヲ有ス（構成法第二十六條）

第一　第一審裁判所トシテ

區裁判所ノ權限ニ屬スルモノ及ヒ構成法第三十八條ニ定メタル控訴院ノ權限ニ屬スルモノヲ除キ其他ノ請求ハ總テ地方裁判所ノ權限ニ屬ス（但シ區裁判所ニ屬スル事件ヲ地方裁判所ニテ判決シタルトキハ其點ヲ不當トシテ上訴スルヲ許サス、民事訴訟法第七條）

第二　第二審裁判所トシテ

（イ）區裁判所ノ判決ニ對スル控訴

（ロ）區裁判所ノ決定及命令ニ對スル法律ニ定メタル抗告

乙　刑事訴訟ニ於テ左ノ事項ニ付キ裁判權ヲ有ス（構成法第二十七條）

第一　第一審裁判所トシテ

區裁判所ノ權限ニ屬セス並ニ大審院ノ特別權限ニ屬セサル刑事訴訟（構成法第五十條第二號）

但シ區裁判所ノ刑事々件ト雖モ地方裁判所ニ起訴セラレタルモノニ付テハ其審判ヲ爲スヘキモノトス（刑事訴訟法第二百四十條）

第二　第二審裁判所トシテ

(イ) 區裁判所ノ判決ニ對スル控訴

(ロ) 區裁判所ノ決定及命令ニ對スル法律ニ定メタル抗告

丙 破産事件ニ付キ一般ノ裁判權ヲ有ス(構成法第二十八條)

丁 非訟事件ニ關ル區裁判所ノ決定及命令ニ對スル法律ニ定メタル抗告ニ付キ裁判權ヲ有ス(構成法第二十九條)

戊 以上掲ケタルモノヽ外訴訟法又ハ特別法ニ於テ定メタルモノ(構成法第三十條)

豫審判事ハ地方裁判所ニ在テ單獨ニ其事務ヲ行フモノトス刑事訴訟法第六十二條ニ從ヒ檢事カ重罪事件ト思料シ又ハ輕罪事件ト思料スルモ其事件重大且ツ繁雜ニシテ豫審ヲ求ムヘキモノト思料シ豫審判事ニ豫審ヲ求メタルトキ及ヒ豫審判事カ檢事ヨリ先キニ重罪又ハ地方裁判所ノ管轄ニ屬スル輕罪ノ現行犯アルコトヲ知リタル場合ニ於テ其事件急速ヲ要スルモノト認メ檢事ノ請求ヲ待タス直チニ其旨ヲ檢事ニ通知シ豫審ニ取掛リ(刑事訴訟法第百四十二條)豫審判事ニ於テ檢證調書ヲ作リタルトキ(刑事訴訟法第百四十三條)ハ其事件ノ公訴ハ其地方裁判所ニ提起セラレタルモノニシテ豫審判事ハ豫審事務ニ付キ其所屬裁判所ヲ代表シ寧ロ其地方裁判所トシテ單獨ニ行動ヲ爲ス權限ヲ有スルモノトス

司法大臣ハ構成法第三十一條ニ基キ地方裁判所ニ屬スル民事及刑事事務ノ一部分ヲ取扱フ爲メ支部ノ設置ヲ命スルコトヲ得ルコトハ已ニ說明セリ支部モ亦其所屬地方裁判所ノ部タルノ性質ヲ失ハス即チ支部ハ部即チ司法上ノ意義ニ於ケル裁判所トシテ其地方裁判所ヲ代表スルコト他ノ部ト異ナルコトナシ隨テ其內部ノ事務取扱ノ關係上ヨリ謂ヘハ其權限ハ司法大臣ノ定メタル民事刑事々務ノ一部分ヲ超越スルヲ得サルカ如シト雖モ外部ニ對シテハ斯ノ如キ制限アリト謂フ能ハスシテ地方裁判所ニ於テ取扱ヒ得ル事務ハ總テ支部ニ於テモ之ヲ取扱ヒ得ルモノト信ス

第三項 控訴院

控訴院ニ於テ訴訟法ニ依リ法廷ニ於テ審問裁判スヘキ事件ハ五人ノ判事ヲ以テ組立テタル部ニ於テ之ヲ審問裁判ス其五人ノ判事中一人ヲ裁判長トス其他ノ事件ハ訴訟法ノ定ムル所ニ從ヒ判事之ヲ取扱フ(構成法第四十條)

控訴院ハ左ノ事項ニ付キ裁判權ヲ有ス

甲 刑事タルト民事タルト其他ノ事件タルトヲ問ハス(構成法第三十七條)

第一　地方裁判所ノ第一審判決ニ對スル控訴

第二　區裁判所ノ判決ニ對スル控訴ニ付キ地方裁判所ノ爲シタル判決ニ對スル上告

第三　地方裁判所ノ決定及命令ニ對スル法律ニ定メタル抗告

乙　皇族ニ對スル民事訴訟ニ付キ第一審裁判所トシテノ裁判權及ヒ第二審裁判所トシテノ裁判權(構成法第三十八條第四十一條)

但シ此裁判權ハ東京控訴院ノミニ專屬シ而シテ右第一審裁判所トシテ裁判權ヲ行フ場合ニハ地方裁判所ニ於ケル第一審ノ訴訟手續ヲ適用スヘキモ其(裁判所即チ)部ハ尙ホ五人ノ判事ヲ以テ構成スヘク第二審裁判所トシテノ裁判權ハ特ニ七人ノ判事ヲ以テ組立テタル部ニ於テ審問裁判スヘキモノトス

丙　以上掲ケタルモノヽ外訴訟法其他ノ法律ニ定メタルモノ

第四項　大審院

大審院ニ於テ訴訟法ニ依リ法廷ニ於テ審問裁判スヘキ事件ハ七人ノ判事ヲ以テ組立テタル部ニ於テ之ヲ審問裁判ス其七人ノ判事中一人ヲ裁判長トス其他ノ事件ハ訴訟法ノ定ムル所ニ從ヒ判事之ヲ取扱フ(構成法第五十三條)

大審院ハ左ノ事項ニ付キ裁判權ヲ有ス

甲　終審トシテ(構成法第五十條第一)

第一　地方裁判所カ第一審裁判所トシテ爲シタル判決ニ對スル控訴ニ付キ控訴院カ爲シタル判決ニ對スル上告

第二　皇族ニ對スル民事訴訟ニ付キ控訴院カ第二審裁判所トシテ爲シタル判決ニ對スル上告

第三　控訴院ノ決定及命令ニ對スル法律ニ定メタル抗告

乙　第一審ニシテ終審トシテ(構成法第五十條第二)

刑法第七十三條、第七十五條及第七十七條乃至第七十九條ノ罪幷ニ皇族ノ犯シタル罪ニシテ禁錮以上ノ刑ニ處スヘキモノヽ豫審及裁判

右事件ニ付キ大審院其必要アリト認メタルトキハ其審問裁判ヲ爲ス爲メ控訴院若ハ地方裁判所ニ於テ法廷ヲ開クコトヲ得ヘク此場合ニ於テハ控訴院判事ヲ以テ部員ニ加ヘ其部ヲ組立ツルコトヲ得然レトモ其半數ニ滿ツルコトヲ得サルモノトス(即チ三人迄ハ控訴院判事ヲ部員ニ加ヘテ大審院ノ部ヲ組織スルヲ得)又右事件ニ

付キテハ大審院長ハ特ニ大審院ノ判事ニ豫審ヲ命スヘク但シ便宜上各裁判所判事ヲシテ豫審ヲ爲サシムルヲ妨ケサルモノトス(構成法第五十一條、第五十五條、尙刑事訴訟法第三百十條乃至第三百十六條參照)

丙　聯合審判(構成法第四十九條第五十四條)

大審院ニ於テ裁判ヲ爲スニ當リ法律ノ點ニ付テ表シタル意見ハ其ノ訴訟一切ノ事ニ付キ下級裁判所ヲ羈束ス(構成法第四十八條)是レ構成法第四十三條ニ大審院ヲ最高裁判所トスト謂フ所以ニシテ大審院ハ主トシテ法律ノ解釋適用ヲ歸一シ國民ヲシテ倚ル處アラシメントスルヲ其職責トスルカ故ニ其各部ニ於テ同一ノ法律點ニ付キ相反スル意見ヲ發表セシムヘカラス若シ同一ノ法律點ニ付キ相容レサル別個ノ意見ヲ發表スルコトヲ許ストキハ或事件ニ付テハ甲ノ結果ヲ生シ他ノ事件ニ付テハ乙ノ結果ヲ生シ國民ハ遂ニ其適從スル所ヲ知ルニ苦マスンハアラス即チ構成法ハ斯ノ如キ惡結果ヲ避クル目的ヲ以テ聯合審判ノ制ヲ設ケタリ

構成法第四十九條ニ規定シテ曰ク大審院ノ或部ニ於テ上告ヲ審問シタル後法律ノ同一ノ點ニ付キ曾テ一若ハ二以上ノ部ニ於テ爲シタル判決ト相反スル意見アルトキハ其部ハ之ヲ大審院長ニ報告シ大審院長ハ其報告ニ因リ事件ノ性質ニ從ヒ民事ノ總部若ハ刑事ノ總部又ハ民事及刑事ノ總部ヲ聯合シテ再ヒ審問シ及裁判スルコトヲ命スト

右場合ニ於テハ聯合シタル數部又ハ全部相合シテ一團トナリ新タニ聯合部ナル一部ヲ組立ツルモノニシテ其聯合部ヲ組織スル判事中官等最モ高キ者ハ部長ト爲リ且ツ裁判長トシテ其事件ヲ審判スヘク又タ大審院長自ラ其部長タルヲ至當ナリト認メタルトキハ自ラ部長タルノ權ヲ有スルモノトス而シテ其審判ヲ爲スニ當リ聯合部ヲ組立ツル判事全員ノ列席ヲ必要トスルトキハ疾病其他差支ノ爲メ容易ニ審判ヲ爲ス能ハサルノ處アルヲ以テ特ニ其三分ノ二ノ列席ヲ以テ審判スルヲ妨ケサルモノトセリ(構成法第五十四條)

丁　以上掲クルモノヽ外訴訟法又ハ特別法ノ定メタル事項ニ付キ裁判權ヲ有ス(構成法第五十二條)

第三章　裁判所ノ管轄

裁判所ノ管轄トハ刑事民事ノ事件ヲ處理スル各裁判所ノ職務ノ範圍ヲ一定シ其

範圍内ニ於テ事件ヲ處理スル權利義務ヲ謂フ尚ホ換言スレハ裁判所ノ管轄トハ裁判所ノ裁判權ノ行ハルヽ事務ノ範圍ニシテ裁判所ノ管轄内ニ於ケル事務ニ對シ裁判所ハ其裁判權ヲ行ヒ得ルモノトス

裁判所ノ管轄ハ事物ト土地トニヨリ看察シ又其他種々ノ方面ヨリ之ヲ看察スルコトヲ得

第一節　事物ノ管轄

事物ノ管轄トハ事件ノ性質ニ因テ裁判權ヲ執行スル裁判所ノ管轄ノ範圍ニシテ或ハ事件ノ種類ヲ區別シ或ハ審級ヲ區別シ或ハ事件ノ輕重ヲ區別シ或ハ訴訟當事者ノ身分（民事ニ於テハ原告又ハ被告刑事ニ於テハ被告ノ身分）ニ因リ之ヲ標準トシテ定ムルモノヲ謂フ』事務管轄ノ範圍ハ前章第四款ニ於テ説明シタル各裁判所ノ裁判權ヲ行フ範圍ト同一ナリ從テ之ヲ再説セスト雖モ民事及ヒ刑事訴訟法トノ關係上特ニ左ノ諸點ヲ注意セサルヘカラス

第一款　民事訴訟ニ付キ

裁判所ノ事物管轄ハ其訴訟物ノ價額ニ依リ定マル場合アリ（構成法第十四條）如斯キ場合ニ其價額ヲ算定スル方法如何ヲ一定スルノ必要ヲ生ス（民事訴訟法第二條）而シテ民事訴訟法ハ其算定ニ付キ左ノ標準ヲ規定ス（民事訴訟法第三條乃至第六條）

(一)　訴訟物ノ價額ハ起訴ノ日時ニ於ケル價額ニ依リ之ヲ算定ス蓋シ訴訟物ノ價額ハ其物ニ付キ爭ノ生シタル當時ト訴ヲ提起スル當時トニ於テ必スシモ同一ナラサルカ故ナリ、起訴ノ時期如何ニ付テハ民事訴訟法第百九十三條第百九十四條及第三百七十八條等ヲ參照スヘシ

(二)　果實、損害賠償及訴訟費用ヲ法律上相牽連スル主タル請求ニ附帶シ一ノ訴ヲ以テ請求スル場合ニハ其價額ヲ主タル請求ノミニヨリ算定シ果實其他附帶ノ請求ニ關スル價額ハ之ヲ算入セス

例ヘハ貸金請求訴訟ニ於テ元本ノ果實タル利息ハ如何ニ巨額ニ達スルモ元本ト同時ニ之ヲ請求スルニ當リ元本カ二百圓以下ナラハ其訴訟ハ區裁判所ノ管轄ニ屬スルカ如シ

(三)　一ノ訴ヲ以テ同時ニ數個ノ請求ヲ爲ストキハ其各個ノ請求額ヲ合算ス但シ前項ニ掲ケタル果實其他ノ附帶請求額ハ之ヲ算入セス又反訴ノ請求

額ヲモ合算スヘカラサルモノトス

反訴ニ付テハ民事訴訟法第二百條及第二百一條ヲ參照スヘシ

(四) 訴訟物ニ一定ノ價額ナキ場合

(イ) 債權ノ擔保又ハ債權ノ擔保ヲ爲ス從タル物權カ訴訟物ナルトキハ其債權ノ額ニ依ルヲ本則トシ若シ右物權ノ目的物ノ價額カ債權ノ額ヨリ寡キトキハ其寡キ物權ノ價額ニ依ル例ヘハ貸金ニ付キ擔保ヲ付スル約束アリタルニ拘ハラス其約束ヲ履行セサルトキ之カ履行ノ訴ヲ提起スルニ當リテ其債權額ト擔保ノ額トヲ比較シ其少キモノニ依リ算定シ又已ニ債權ニ付シタル擔保即チ債權抵當權等ニ付キ訴ヲ起ス場合ニハ其債權額ト其擔保物ノ價額トヲ比較シ其少キモノニ依ルカ如シ

(ロ) 地役カ訴訟物ナル場合ニハ要役地カ其地役ノ設定ニヨリ增加シタル增加差額ト承役地カ其地役ニヨリ減シタル減少差額トヲ比較シ其何レカ大ナル差額ヲ以テ訴訟物ノ價額トス

(ハ) 訴訟物カ賃貸借又ハ永小作權(地上權ヲモ含ムヘシト信ス)ノ契約ノ有無又ハ其時期ナル場合ニ於テハ爭アル時期ニ當ル賃貸借又ハ永小作權ノ許價額ト一個年間ノ賃料ヲ二十倍シタル額トヲ比較シ其寡キモノニ依ル

(二) 定時ノ供給又ハ收益ニ付テノ權利ナルトキハ

甲 其收入繼續ノ期間定マラサルモノニ付テハ一個年收入ノ二十倍ノ額

乙 右期間ノ定マリタルモノニ付テハ訴提起ノ時ヨリ以後ノ將來ノ收入總額ト一個年收入ノ二十倍ノ額トヲ比較シ其寡キ額ヲ以テ訴訟物ノ價額トス

(五) 價額ニ付キ爭ヲ生シ直チニ以上掲クル所ニ據ル能ハサルトキハ裁判所ハ當事者ノ申立ニ因リ證據調ヲ爲シ又ハ職權ヲ以テ檢證若クハ鑑定ヲ命シ其結果ヲ參酌シ裁判所ノ見込ヲ以テ之ヲ定ムルモノトス

第二款 刑事訴訟ニ付キ

裁判所構成法ニ定ムル事物管轄ハ一被告人カ一犯罪ヲ犯シタル場合ヲ規定シタルノミ從テ

(一) 管轄ヲ異ニスル數個ノ犯罪ニ付キ同時ニ同一ノ被告人ニ對シ訴アリタ

ルトキハ上級ノ裁判所併セテ之ヲ管轄ス(刑事訴訟法第二十五條第二項)

例ヘハ構成法ノ規定ニ因リ區裁判所ノ管轄ニ屬スル竊盜事件ト地方裁判所ニ屬スル强盜事件ト同一被告人ニ對シ同時ニ訴アリタルトキハ地方裁判所ニ於テ强盜事件ト共ニ竊盜事件ヲモ併セ管轄シ大審院ノ特別權限ニ屬スル刑法第七十七條ノ内亂罪ヲ犯シタルモノト同一被告カ區裁判所ニ屬スル竊盜、地方裁判所ニ屬スル强盜罪ヲ犯シ同時ニ公訴ノ審判ヲ爲ストキハ大審院其總テヲ管轄スルカ如キヲ謂フ蓋シ併合罪ハ一ノ重キニ從テ處斷スルヲ原則トシタルヲ以テナリ、同時ニ訴アリタルトキトハ同時ニ審理判決スヘキトキト謂フノ意ナルヲ以テ已ニ一罪發シ地方裁判所ニ於テ審理中同一被告ニ對シ區裁判所ニ屬スル他罪發覺シタルトキハ之ヲ地方裁判所ニ起訴スヘキモノトス然レトモ地方裁判所ニ於テ一罪ニ付キ已ニ判決ヲ言渡シタル後其事件ニ付キ控訴中區裁判所ニ屬スル他罪發覺シタルトキ控訴院ニ於テ之ヲ併セ審判シ得ルヤ否ヤニ付キ疑問ナキニ非スト雖モ如斯場合ハ之ヲ包含セサルモノト解スルヲ可トス要之ニ同時トハ同一審級ニ於テ未タ判決ヲ言渡サレサル間ト解セサルヘカラス

尚ホ刑事訴訟法第六十二條ノ解釋トシテ同一被告ニ對シ重罪又ハ區裁判所ニ屬セサル輕罪ト區裁判所ニ屬スル罪ト同一被告ニ對シ併合シタルトキハ地方裁判所檢事ハ區裁判所ニ屬スル罪ノミヲ分離シ之ヲ區裁判所檢事ニ送致スヘキナリト謂フモノアレトモ否ナリ同條第三項ノ規定ハ第二十五條第二項ニ該當セサル場合ノミニ限ルト解スルヲ正シトス

(二) 數名ノ共犯者中其身分ヲ異ニスルニ依リ又ハ刑法第三十八條第二項ノ適用上其管轄ヲ異ニスル場合モ亦刑事訴訟法第二十五條乃至第二十八條ノ趣旨ヲ擴張シテ解釋スルトキハ之ヲ上級裁判所ニ管轄セシムルモノト解スルヲ相當トス

第二節　土地ノ管轄

土地ノ管轄トハ裁判所カ土地ノ區域ニ依リ其裁判權ヲ行使シ得ル範圍ヲ謂ヒ全國ヲ數個乃至數百個ノ裁判區畫ニ分チ各裁判所ハ其區域内ノ刑事民事ノ事件ノミヲ處理スル權アルモノトス構成法第四條ニ裁判所ノ設立廢止及管轄區域并ニ

其變更ハ法律ヲ以テ之ヲ定ムト規定シ明治二十三年八月法律第六十二號ヲ以テ裁判所ノ位置及管轄區域ヲ定メタリ但其後左ノ數回變更アリ

明治二四年法律第二八號、二八年法第二一號、二九年法第六一號、同第八八號、三二年法第二〇號、三三年法第二三號、同第五八號、三五年法第二四號、三八年法第五九號、第六〇號、第六一號、四〇年法第一三號、同第三二號、同第二八號

例ヘハ大審院ハ之ヲ東京ニ置キ日本領土全部(但シ臺灣ヲ除ク)ニ亘リ土地ノ管轄ヲ有シ東京控訴院ハ之ヲ東京ニ置キ東京、横濱、千葉、水戸、宇都宮、浦和、前橋、靜岡、甲府長野及新潟ノ各地方裁判所ノ管轄ニ屬スル區域全部ニ亘リテ土地ノ管轄ヲ有シ東京地方裁判所ハ之ヲ東京ニ置キ八王子、東京、新島、八丈島及ヒ父島ノ各區裁判所ノ管轄ニ屬スル區域全部ニ亘リテ土地ノ管轄ヲ有シ東京區裁判所ハ武藏國ノ一部即チ東京市、荏原郡、豐多摩郡、北豐島郡、南足立郡及南葛飾郡ノ一市五郡ト伊豆國ノ一部即チ大島トヲ其土地ノ管轄トス

而シテ民事又ハ刑事ノ事件カ何レノ土地管轄區域內ニ屬スルヤヲ定ムルニ付テハ各種ノ標準アリ此點ニ付キ民事訴訟法及刑事訴訟法ノ規定ヲ說明セサルヘカラス

土地ノ管轄トハ各裁判所カ其裁判權ヲ行使シ得ル土地ノ範圍ヲ指スモノナルコト已ニ述フルカ如クニシテ地域其自體ノ方面ヨリ看察シタル詞ナリ訴訟法ニ於テハ之ヲ人即チ其裁判所ニ於テ裁判ヲ受クル者(刑事ナラハ被告人民事ナラハ當事者)ノ方面ヨリ看察シテ裁判籍ト謂フコトアリ

第一款　民事々件ノ土地管轄(即チ裁判籍)

土地ノ管轄ニハ二種アリ

甲　普通ノ土地管轄――普通裁判籍

即チ當事者ト土地トノ或一定ノ關係ヲ標準トシテ一切ノ訴ヲ提起スルヲ得ル裁判所ノ土地管轄

乙　特別ノ土地管轄――特別裁判籍

即チ當事者ト土地トノ或一定ノ關係ヲ標準トシ或特定ノ種類ノ訴ヲ提起スルヲ得ル裁判所ノ土地管轄

第一項　普通裁判籍

普通裁判籍ハ民事訴訟法第十條乃至第十四條ニ之ヲ規定ス此裁判籍ヲ定ムル標準ヲ二トス

甲　住所

裁判籍ハ被告人ト爲ルヘキ者ノ住所ヲ以テ其標準トシ之ヲ定ムルヲ原則トス民事訴訟法第十條ニ人ノ普通裁判籍ハ其住所ニ依リテ定マル普通裁判籍アル地ノ裁判所ハ其人ニ對スル總テノ訴ニ付キ管轄ヲ有スト規定スルハ其趣旨ニ出ツ

住所トハ吾人ノ生活ノ本據ナリ其意義如何ハ民法ノ講義ニ讓リ爰ニハ單ニ住所トハ本籍又ハ寄留ト稱スルト同一意義ヲ有セス又タ居所若ハ現在地ト稱スルト同シカラサルコト竝ニ住所ノ知レサル場合ニ於テハ居所ヲ以テ住所ト看做スコト(民法第二十二條)及ヒ日本ニ住所ヲ有セサル者ハ內外人ヲ問ハス其日本ニ於ケル居所ヲ住所ト看做スコト(同法第二十三條)ヲ注意シ置クニ止ム

住所ノ意義ハ民法ノ定ムル所ニ依ルヘキモノトス然レトモ左ノ場合ニ於テハ民事訴訟法上土地管轄ヲ定ムル關係上特別ノ住所トス

(一)　軍人、軍屬ニシテ豫備後備ノ軍籍ニアル者及兵役義務履行ノ爲メノミニ服役スル軍人軍屬ヲ除キ其他ノ軍人軍屬ニ付テハ兵營地若ハ軍艦定繫地ヲ以テ住所トス即チ此等ノ軍人軍屬ニ付テハ民法上ノ住所ヲ以テ普通裁判所ヲ定ムルヲ許サス

(二)　外國ニ在ル本邦ノ公使及公使館ノ官吏竝ニ其家族從者ニ付テハ此等ノ者カ本邦ニ於テ最後ニ有シタリシ住所ヲ以テ普通裁判籍ヲ定ム其最後ノ住所ナキ者ニ付テハ司法大臣ハ豫メ命令ヲ以テ東京市內ノ一區ヲ指定シ其住所トス

(三)　內國ニ住所ヲ有セサル者ニ付テハ本人ノ現在地ヲ以テ住所トス其現在地知レサルカ又ハ外國ニ在ルトキハ其內國ニ於ケル最後ノ住所ヲ以テ住所トス但シ此等ノ者ニ對シテハ其訴訟ノ目的タル權利關係カ內國ニ於テ生シタルトキニ限リ裁判所ハ管轄ヲ有ス

乙　住所以外ノ標準

(一)　國ノ普通裁判籍ハ訴訟ニ付キ國ヲ代表スル官廳ノ所在地ニ依リ定ム

(二)　公法人又ハ私法人及ヒ其資格ニ於テ訴ヲ受クルコトヲ得ル會社其他ノ社團又ハ財團等ニ付テハ其所在地ヲ以テ普通裁判籍トス而シテ別段ノ定メナキトキハ其所在地ハ其事務所ノ所在地トシ若シ事務所ナキトキ又ハ數个所ニ事務所ヲ有スルトキハ其首長又ハ事務擔當者ノ住所ヲ以テ事務

所ト看做ス

民法第五十條ニ依レハ法人ノ住所ハ事務所所在地ニ在ルモノトスト規定シ商法第四十四條ニハ會社ノ住所ハ其本店ノ所在地ニ在ルモノトスト規定スル處ニヨリ之ヲ推考スルトキハ國ヲ代表スル官廳ノ所在地、社團、財團ノ所在地等ハ即チ此等ノ者カ被告トシテ訴ヲ受クルニ付キ訴訟法上其裁判籍ヲ定ムル住所ト看做シタルモノト解スルヲ得ヘシ即チ人ノ普通裁判籍ハ何レノ場合ニ於テモ其住所ニ依リテ定マリ其住所ヲ管轄スル裁判所ハ其住所ヲ有スル人ニ對シテ提起セラレタル訴訟ヲ裁判スル土地ノ管轄ヲ有スルモノニシテ乙ノ各場合ニ於テハ國又ハ社團財團ニ關スル裁判上特別ノ住所ヲ定メタルモノト謂フヲ得ヘク從テ普通裁判籍ハ被告ノ住所以外ハモノヲ標準トスルコト無シト論結スルヲ得ヘシ

第二項　特別裁判籍

特別裁判籍ハ民事訴訟法第十五條乃至第二十五條ニ之ヲ規定ス特別裁判籍ハ普通裁判籍ニ對スル補充ノ裁判籍ニシテ同一事件ニ付キ特別裁判籍ヲ管轄スル裁判所カ其事件ニ付キ管轄ヲ有スルト同時ニ普通裁判籍ヲ管轄スル裁判所モ亦其事件ニ付キ管轄ヲ有スルモノトス

特別裁判籍ハ左ノ如シ

(一) 生徒、雇人、營業使用人、職工、習業者其他性質上一定ノ地ニ寓在スヘキ者ニ對シテハ財産權上ノ請求ニ付テ其現在地ノ裁判所

(二) 兵役義務履行ノ爲メノミニ服役スル軍人軍屬ニ對シテハ財産權上ノ請求ニ付テ其兵營地若ハ軍艦定繫所ノ裁判所

(三) 製造商業其他ノ營業ニ付キ直接ニ取引ヲ爲ス店舗ヲ有スル者ニ對シテハ其營業上ニ關スル訴ニ付キ其店舗所在地ノ裁判所

(四) 住家及農業用建物アル地所ヲ利用スル所有者、用益者又ハ賃借人ニ對シテハ其地所ノ利用ニ關スル權利關係ヲ有スル訴ニ付キ其住家又ハ建物アル地ハ裁判所

(五) 内國ニ住所ヲ有セサル債務者ニ對スル財産權上ノ請求ニ付テハ其債務者ノ財産又ハ請求物ノ所在地ノ裁判所

財産ノ所在地如何ニ付テハ民事訴訟法第十七條參照

(六) 契約ノ成立若ハ不成立ノ確定、契約ノ履行、契約ノ鎖除、廢罷、解除又ハ契約ノ不履行若ハ不完全ノ履行ニ關スル賠償ノ訴ハ其請求ニ係ル義務履行地ノ裁判所

(七) 會社其他ノ社團ヨリ社員ニ對シ又ハ社員ヨリ社員ニ對シ何レモ其社員タル資格ニ於テノ請求ニ付テハ其會社其他ノ社團ノ普通裁判籍アル地ノ裁判所

(八) 不正損害ニ付キ其責任者ニ對スル請求ニ付テハ其不正行爲ノ有リタル地ノ裁判所

(九) 辯護士又ハ執達吏ノ手數料及立替金ニ付キ其委任者ニ對スル請求ハ其本訴訟ノ第一審裁判所

(十) 不動產上ノ訴殊ニ本權竝ニ占有ノ訴及分割竝ニ經界ノ訴ニ付テハ其不動產所在地ノ裁判所

(但シ地役ニ付テノ訴ハ承役地所在地ノ裁判所)

(十一) 債權ノ擔保ヲ爲ス從タル物權(質權、先取特權、抵當權等)ニ基ク不動產上ノ訴ニ附帶シ訴ニ於ケルト同一被告ニ對スル債權ノ訴、不動產ノ所有者若ハ占有者ニ對スル債權ノ訴又ハ不動產ニ加ヘタル損害ノ訴ニ付テハ其不動產所在地ノ裁判所

(十二) 相續權、遺贈其他死亡ニ因リテ效力ヲ生スル處分ニ基ク請求ノ訴ニ付テハ遺產者死亡ノ時ニ普通裁判籍ヲ有シタル裁判所——之ヲ相續裁判籍ト稱ス——遺產債權者又ハ相續人ニ對スル請求ノ訴ニ付キ其遺產ノ全部又ハ一部カ其管轄區內ニ存在スルトキ亦同シ

以上列記スル所ヲ特別裁判籍トス特別裁判籍ハ其訴ノ性質ニ依リ便宜上認メタルモノニシテ同一ノ訴カ同時ニ普通裁判籍ト特別裁判籍ノ一個又ハ數個ニ於テ管轄ノ存スルコトアリ得ヘキカ故ニ原告ニ於テハ自ラ其便宜ナリト考フル所ノ裁判籍ヲ選擇シ得ルモノトス

然レトモ十)ニ掲ケタル不動產上ノ訴ニ付テノ特別裁判籍ハ普通裁判籍ヲ排除スルモノニシテ不動產上ノ權利關係ニ付テハ其不動產ノ所在地ノ裁判所ニ於テ審判スルニ非サレハ不便甚シキヲ以テ(例ヘハ土地ノ實地檢分ヲ爲シ又ハ登記簿ヲ調査スルカ如キ)特ニ不動產上ノ訴ニ付テハ其所在地ノ裁判所ノミ管轄ヲ有スルモノトシ他ノ裁判籍ヲ認メサルコトトセリ之ヲ專屬裁判籍ト謂フ

第二款　刑事訴訟ノ土地管轄

刑事訴訟ノ土地管轄ヲ定ムルニ付テハ各國法制同一ナラス或ハ犯罪地ヲ以テシ或ハ犯人ノ住所地ヲ以テシ或ハ逮捕地ヲ以テス

我現行ノ刑事訴訟法ハ犯罪地及被告人ノ所在地ノ裁判所ヲ以テ等シク土地ノ管轄ヲ有スルヲ原則トシ數個ノ裁判所同一事件ニ付キ同時ニ土地ノ管轄ヲ有スルトキハ最初ニ豫審又ハ公判ニ着手シタル裁判所其管轄ヲ有スルモノトス(刑事訴訟法第二十六條第二十七條)

從犯ハ正犯ヲ管轄スル裁判所ヲ以テ其管轄トス——刑事訴訟法第二十八條第一項但シ正犯已ニ判決ヲ經タル後從犯ノミニ付キ單獨ニ裁判スヘキ場合ニ於テハ其從犯ノ行ハレタル犯罪地又ハ從犯者ノ所在地ノ裁判所其管轄ヲ有スルハ勿論ナリ

又裁判所構成法第五十條第二號ニ規定シタル皇族ノ犯罪ニ付テハ其正犯從犯ハ身分ノ如何ヲ問ハス大審院ニ於テ之ヲ管轄スヘキモノトス

數個ノ裁判所ノ管轄ニ屬スル正犯數名アルトキハ最初豫審又ハ公判ニ着手シタル裁判所其管轄ヲ有スルモノトス

但シ共犯ノ一又ハ數名ニ對シ已ニ判決ヲ爲シタル後ハ其判決裁判所カ管轄ヲ有セサル他ノ共犯ニ付キ裁判ヲ爲スヲ許サス

一　犯罪地ノ管轄

犯罪地トハ犯罪ノ構成要件タル事實ノ全部又ハ一部カ行ハレタル地ヲ云フ

犯罪地ノ意義如何ニ付テハ學說一定セス刑法ニ於ケルト刑事訴訟法ニ於ケルトニヨリテモ亦其解釋ヲ異ニス故ニ此點ニ付テハ刑法及刑事訴訟法ノ學說ヲ研究スヘシ

二　被告人所在地

刑事訴訟法ニ被告人所在地ト謂フハ被告事件ニ付キ公訴提起ノ時被告人ノ現在シタル地ヲ謂フト解セサルヘカラス犯罪行爲ノ當時現在シタル地タルト否トヲ問ハサルナリ

被告人カ公訴提起ノ當時現在スルハ如何ナル原因ニ依ルモ可ナリト雖モ其被告事件ニ付キ起訴ヲ爲スノ目的ヲ以テ特ニ他管轄內ヨリ現行犯トシテ逮捕シ引致シ來リタルカ如キ場合ニ於テハ之ヲ被告人ノ所在地ト謂フ能ハサルヘシ』外國ニ於テ犯シタル罪ニ付テハ內國ニ犯罪地ナキカ故ニ裁判所ノ土地ノ管轄ハ

被告人ノ所在地ニヨリテ定ムル外ナキモ斯ノ如キ犯人ハ內國ニ所在セサル場合多キカ故ニ刑事訴訟法第二十九條ハ外國ニ在テ犯シタル罪本邦ノ法律ニ依リ處斷スヘキモノニシテ(刑訴第一條以下)內地ニ於テ被告人ヲ逮捕シタルトキハ其逮捕地ノ裁判所ヲ管轄裁判所トシ外國ヨリ送致シタルトキハ其送致地ノ裁判所ヲ管轄裁判所トス若シ內國ニ於テ逮捕スル能ハス又外國ヨリ送致セサルトキ其他被告人ノ所在不明ノ爲メ闕席判決ヲ爲スヘキ場合ニ於テハ被告人ノ內國ニ於ケル最後ノ住所地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ヲ有スルモノトスル旨ヲ規定セリ

內國ニ於テ犯シタル罪ニ付キ其犯罪地竝ニ被告人ノ所在地共ニ不明ナル場合ニハ現行ノ法律上之レニ對シテ管轄ヲ有スル裁判所ヲ定ムル能ハス之レ法ノ一缺點ナリ

海船內ノ犯罪ニ付テハ定繫港又ハ犯罪後最初ニ著船シタル地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス——刑事訴訟法第三十條——但シ被告人上陸後起訴スヘキ場合ニ於テハ其起訴當時ノ所在地ノ裁判所管轄ヲ有スルハ勿論ナリトス

刑事訴訟ノ事物管轄ニ付テハ前節已ニ說明シタルカ如ク上級裁判所ハ下級裁判所ノ管轄ニ屬スル事件ト雖モ之ヲ審判スルヲ得ヘキモ土地ノ管轄ハ土地ノ範圍ヲ標準トシ同等ノ裁判所間ニ於ケル權限ヲ一定シタルモノナルカ故ニ其管轄ハ互ニ相侵スコトヲ許サヽルヲ以テ原則トナス但シ土地管轄ノ規定ニ違背シ免訴又ハ無罪ノ言渡ヲ爲シタル場合ニ於テハ之ヲ以テ上告ノ理由ト爲スヲ得サルモノトス

第三節　管轄ノ指定

裁判所ノ管轄ハ民事刑事ニ付キ或ハ事物ノ性質ニ依リ或ハ土地ノ區劃ニ依リ之ヲ定ムルコトハ前節說明ノ如シ然レトモ時ニ或ハ法律上管轄權ヲ有スル裁判所カ其裁判權ヲ行フ能ハサルコトアリ或ハ管轄權ノ有無ニ付キ不明ナルコトアリ即チ裁判所構成法第十條ハ上級裁判所ヲシテ其管轄ヲ指定セシム之ヲ管轄ノ指定ト云フ

其場合左ノ如シ

第一　權限アル裁判所及ヒ裁判所構成法第十三條第二項ニ依リ代理タル裁判所ニ於テ法律上ノ理由若クハ特別ノ事情ニ因リ裁判權ヲ行フコトヲ得サルトキ

法律上ノ理由ニヨリ裁判權ヲ行フヲ得サルトキトハ例ヘハ管轄裁判所及其代理タル裁判所ノ判事ニ除斥ノ原因存在シ又ハ忌避ノ申請理由アリト認メラレタル爲メ適法ナル裁判所(第三意義ノ)ヲ構成シ能ハサルトキノ如キヲ謂ヒ特別ノ事情ニ因リ裁判權ヲ行フコトヲ得ストハ例ヘハ天變地異又ハ兵亂等ノ爲メニ裁判ヲ開ク能ハス或ハ判事疾病ニ罹リ又ハ死亡シタル等ノ爲メニ適法ナル裁判所ヲ構成シ得サルトキノ如キヲ謂フ但シ斯ノ如キハ其實例甚タ少シ

第二　裁判所ノ管轄區域ノ境界明確ナラサルカ爲メ其權限ニ付キ疑ヲ生シタルトキ

現行ノ制度ニ依レハ裁判管轄ノ區域ハ主トシテ行政區劃ヲ標準トセルカ故ニ行政區劃ノ境界ニ付キ爭アル場合ニ於テ此問題ヲ生ス

第三　法律上二個又ハ二個以上ノ裁判所カ同一事件ニ付キ裁判權ヲ互有スルトキ(イ)

之ヲ民事ニ付テ謂ヘハ例ヘハ不正損害ノ特別裁判籍ハ其行爲地ノ裁判所所在地ニ在リ而シテ若シ其行爲カ二個ノ裁判所ノ境界ニ亘リテ行ハレタルトキノ如ク之ヲ刑事ニ付テ謂ヘハ二以上ノ裁判所カ同一事件ニ付キ何レモ管轄ヲ有シ而カモ日時ヲ同シクシテ豫審又ハ公判ニ着手シタルトキノ如キヲ謂フ

二個以上ノ確定判決ニ因リ二個以上ノ裁判所カ同一事件ニ付キ裁判權ヲ互有スルトキ(ロ)

即チ同一事件ニ付キ數個ノ裁判所カ當事者ヨリ管轄違ノ申立アリタルニ拘ハラス管轄アリト信シテ其旨ノ判決ヲ爲シ其判決何レモ確定シタルトキノ如キヲ謂フ

第四　二以上ノ裁判所カ裁判權ヲ有セストノ確定判決ヲ爲シタルモ其裁判所ノ一ニ於テ裁判權ヲ行フヘキトキ(イ)

民事刑事ノ事件ハ何レカ一個ノ裁判所ノ管轄ニ屬スルモノナリ然ルニ法律上管轄權ヲ有スル裁判所ニ於テ其管轄ナシトノ裁判ヲ爲シテ確定シタルヲ以テ更ラニ其事件ヲ他ノ裁判所ニ起訴シタルニ亦管轄ナシトノ裁判ヲ爲シタル如キ場合ヲ謂フ

二以上ノ裁判所カ裁判權ヲ有セストノ確定判決ヲ受ケタルモ其裁判所ノ一

ニ於テ裁判權ヲ行フヘキトキ(ロ)

(ロ)ノ場合カ(イ)ノ場合ト異ナル點ハ二以上ノ裁判所カ管轄權ヲ有セストノ判決ヲ爲シタルニ對シ上訴裁判所カ之ヲ是認シタル判決ヲ爲シ又ハ右反對ノ場合ニ於テ上訴裁判所カ原裁判所ニ管轄ナキ旨ノ判決ヲ爲シ何レモ其上訴裁判カ確定シタル場合ナリ

右(イ)(ロ)ノ何レノ場合ニ於テモ二個又ハ二個以上ノ裁判所ニ管轄ナキコトノ確定判決アリシコト、其中ノ一個ノ裁判所ニハ法律上管轄アルモノナルコトヲ要ス

第四ノ場合ハ法文ニ確定判決トアレトモ豫審終結ノ決定ヲモ含ムモノト解スルヲ正シトス

第五 (民事々件ニ限ル)——不動産上ノ裁判籍ニ訴ヲ起ス可キ場合ニ於テ其不動産カ數個ノ裁判所ノ管轄區內ニ散在スルトキ

民事訴訟法第二十六條ニ規定スル所ナリ

管轄指定ハ書面ニ基キ審理決定ス其決定ヲ爲ス裁判所ハ爭ニ關係アル各裁判所ヲ併セテ管轄スル直近上級ノ裁判所トス——裁判所構成法第十條(民事訴訟法第二十七條刑事訴訟法第三十條)

大審院
- 東京控訴院
  - 東京地方裁判所
    - 東京區裁判所
    - 八王子區裁判所
  - 横濱地方裁判所
    - 横濱區裁判所
- 大阪控訴院
  - 大阪地方裁判所
    - 大阪區裁判所

右ノ表中東京區裁判所ト八王子區裁判所トカ係爭裁判所ナルトキハ其二個ヲ併セテ管轄スル直近上級裁判所ハ東京地方裁判所ナリ「東京地方裁判所」ト横濱地方裁判所」又ハ「東京區裁判所」ト横濱區裁判所」ノ直近上級裁判所ハ何レモ東京控訴院ナリ「東京控訴院」ト大阪控訴院」又ハ「東京區裁判所」ト大阪區裁判所」ノ直近上級裁判所ハ何レモ大審院ナリ以上ヲ類推シテ直近上級裁判所ノ意義ヲ知ルヘシ

尙ホ管轄指定ノ申請及ヒ裁判ニ付テハ民事訴訟法第二十八條、刑事訴訟法第三十二條、第三十三條ニ其規定アリ

第四節　管轄ノ移轉

第一款　民事管轄ノ移轉——合意管轄

裁判管轄ノ規定ハ公益規定ナリト雖モ民事訴訟法ハ素トヨリ當事者ノ便益ヲ主トスルカ故ニ當事者ノ意思ヲ容レ法定ノ管轄ニ據ラス他ノ裁判所ヲ管轄裁判所トシテ選定セシムルモ甚シク不可ナリト謂フ能ハス民事訴訟法第二十九條乃至第三十一條ハ一定ノ條件ノ下ニ此管轄移動ニ關スル規定ヲ設ク

第二十九條ノ規定ニ依レハ第一審裁判所ハ法律上管轄權ヲ有セサルモ當事者ノ合意ニ因リ管轄ヲ有ス但シ書面ヲ以テ合意ヲ爲シ且其合意カ一定ノ權利關係ヨリ生スル訴訟ニ係ルトキニ限ルモノトス

爰ニ第一審裁判所ト謂フハ區裁判所及地方裁判所ノミヲ指スモノニシテ東京控訴院カ皇族ノ民事訴訟ニ付キ第一審裁判ヲ爲スカ如キハ專屬ノ性質ヲ有スルカ故ニ當事者ノ合意ヲ以テ之ヲ左右スル能ハサルモノト解スルヲ相當トス

而シテ右當事者ノ合意ニ因リ有スル管轄ハ其土地管轄タルト事物管轄タルトヲ問ハス例ヘハ二百圓以上ノ請求ニ付テハ本來地方裁判所ヲ以テ事物管轄ノ裁判所ト爲スト雖モ當事者ハ隨時之ヲ區裁判所ノ管轄トシテ審判ヲ受クルヲ得ヘク又タ例ヘハ本來大阪地方裁判所ノ管轄ニ屬スル事件ニ付キ其土地管轄ヲ東京地方裁判所ニ移スノ合意ヲ爲スヲ妨ケサルナリ管轄ノ合意ハ第一審裁判所ニ關シテ爲スモノナリト雖モ其效果ハ單ニ第一審裁判所ノ管轄ヲ移轉セシムルノミナラス當然ニ上級審ノ裁判所ニモ及ホスモノニシテ前例ニ付テ之ヲ謂ヘハ地方裁判所ニ屬スル事件ニ付キ第一審裁判所ヲ區裁判所ニ選定シタルトキハ其第二審ハ地方裁判所第三審ハ控訴院ニ於テセサルヘカラス又大阪地方裁判所ニ屬スル事件ニ付キ東京地方裁判所ヲ選定シタルトキハ第二審モ亦東京控訴院ニ於テセサルヘカラサルモノトスルカ如シ

管轄ノ合意ハ其合意ニヨリ絕對ニ法定ノ管轄裁判所ノ管轄ヲ排斥シテ之ヲ他ニ移スモノニハアラスシテ當事者カ合意管轄ヲ定メタルトキト雖モ尙ホ法定ノ管轄裁判所ハ管轄權ヲ有スルカ故ニ當事者ハ其合意ニ基カスシテ法定ノ管轄裁判所ニテ審理判決ヲ受クルヲ得ルモノニシテ合意管轄ハ其性質恰モ特別裁判籍ノ如シト謂フヘシ（若シ當事者カ特定ノ裁判所以外ニ訴ヲ提起セスト合意シテ之ニ違反シタル時ハ損害賠償ノ請求ヲ爲シ得ヘキノミ）

管轄ノ合意ハ書面ヲ以テ爲スヲ必要トシ而シテ其合意ハ一定ノ權利關係及ヒ其權利關係ヨリ生スル訴訟ニ係ルヲ必要トスルカ故ニ單ニ漠然汝ト我トノ一切ノ訴訟ハ某裁判所ヲ管轄トスト云フカ如キ合意ハ無效ナリ

右述フル所ハ當事者カ特ニ合意シテ管轄ヲ選定スルモノニシテ民事訴訟法ハ尙ホ第三十條ニ於テ

被告カ管轄違ノ申立ヲ爲サスシテ本案ノ口頭辯論ヲ爲ストキハ亦前條ト同一ノ效力ヲ生ス

ト規定シタリ學者或ハ之ヲ暗默ノ合意管轄ト謂フ即チ訴ヲ提起シタル裁判所ハ本來管轄ヲ有セサルニ拘ハラス被告ニ於テ其管轄ヲ爭ハスシテ應訴シタルハ管轄ニ付キ合意ヲ爲シタルト同視スルヲ謂フナリ

合意管轄ニ付テハ左ノ二個ノ制限アリ——民事訴訟法第三十一條

一　財産上ノ請求ニ非ラサル訴訟

主トシテ身分權上ノ訴訟ニシテ例ヘハ離婚離緣ノ訴訟ノ如キハ公益ニ關スル重大ナル結果ヲ生スルコトアルヲ以テ法定ノ管轄裁判所以外ニ於テ審判スルヲ許サス

二　專屬管轄ニ屬スル訴ナルトキ

專屬管轄ヲ定メタルハ主トシテ公益ニ基クモノナリ之ヲ當事者ノ意思ニ因リ變更セシムルハ專屬管轄ヲ定メタル趣旨ニ反スルカ故ナリ

第二款　刑事訴訟ノ管轄ノ移轉

民事訴訟ト異リ刑事訴訟ハ專ラ公益ニ基クカ故ニ民事訴訟ニ於ケルカ如ク合意管轄ナルモノヲ認メス刑事訴訟ニ付テハ檢事原告タリ犯罪者被告タリト雖モ檢事ト犯罪者トハ民事訴訟ニ於ケル原告ト被告トノ關係トハ全ク異ルモノアルカ故ナリ

刑事訴訟ニ於ケル管轄ノ移轉トハ或事件ニ付キ法定ノ管轄裁判所ニ於テ審判ヲ爲スヲ公益上不適當ト認ムル事情アル場合ニ於テ管轄權ナキ他ノ同等ノ裁判所ニ其事件ヲ移シテ審判セシムルヲ謂フ即チ法律上定メタル土地ノ管轄裁判所以外ノ裁判所ニ新ニ管轄ヲ移スモノナリ

刑事訴訟法第三十四條乃至第三十九條ニ之ヲ規定ス其場合二個アリ

(一)　公安ノ爲メニスル移轉——刑事訴訟法第三十四條——犯罪ノ性質、被告人ノ身分、員數、地方ノ民心、其他ノ重大ナル事情ニ由リ裁判ニ對シ紛擾又ハ危險ヲ生スル恐アルトキハ司法大臣ノ命ニ因リ大審院檢事總長ヨリ同院ニ申請シ大審院ハ訴訟關係人ノ申立ヲ聽カスシテ決定ヲ以テ移轉ノ裁判ヲ爲スモノトス

(二) 嫌疑ノ爲メニスル移轉——同法第三十六條——被告人ノ身分地方ノ民心又ハ訴訟ノ模樣ニ因リ裁判ノ公平ヲ維持スルコト能ハサル恐アルトキハ其事件ノ管轄裁判所ノ檢事其他訴訟關係人ヨリ上級裁判所ニ宛テ其趣意書二通ヲ原裁判所ニ差出シ裁判所書記ハ速ニ一通ヲ相手方ニ送達シ相手方ハ其送達アリタルヨリ三日內ニ答辯書ヲ差出スヲ得ルモノトシ尙原裁判所ハ右申請ヲ受クルト同時ニ其訴訟手續ヲ停止シ他ノ一通ノ申請趣意書及答辯書ヲ上級裁判所ニ送致シ上級裁判所ニ於テハ其書類ニ依リ決定ヲ以テ其申請ニ付キ裁判スルモノトス

此場合ノ申請ハ訴訟關係人ヨリモ爲シ得ルコトハ右ニ記シタルカ如シト雖モ被告人及ヒ私訴ノ原告人カ申請ヲ爲スニ付テハ制限アリ即チ被告人ハ其裁判所ニ於テ議ノ申立ヲ爲サスシテ本案ニ付キ辯論シタルトキ私訴ノ原告人ハ其裁判所ニ私訴ヲ提起シタルトキハ何レモ右申請權ヲ失フモノトス

大審院又ハ上級裁判所ニ於テ申請ヲ却下シタルトキハ原裁判所ニ於テ更ラニ審理ヲ續行スヘク申請ヲ許可シ決定ヲ以テ裁判所ノ管轄ヲ移轉シタルトキハ其事件ハ當然之レニ因リ移轉ヲ受ケタル裁判所ニ繫屬スルモノトス(刑事訴訟法第二百十二條第二號第二百三十五條第一項參照)

前節ニ說明シタル指定ノ決定ハ單ニ管轄裁判所ヲ指定スルニ止マリ當然ニ其事件ヲ裁判所ニ繫屬セシムルモノニアラス

第五節　檢事局ノ管轄

構成法第六條第三項ニ檢事局ノ管轄區域ハ其ノ附置セラレタル裁判所ノ管轄區域ニ同シト規定スルノ外事物管轄ニ付テハ勿論土地ノ管轄ニ付テモ別段ノ規定ナシト雖モ法ノ精神ハ蓋シ其附置セラレタル裁判所ノ事物竝ニ土地管轄ト同一視スルニ在ラン今日ノ實際上ノ取扱ニ於テモ亦其範圍ヲ出テサルカ如シ

第二編　裁判所及ヒ檢事局ノ官吏其他ノ吏員ノ資格及ヒ任免

憲法第十九條ニ日本臣民ハ法律命令ノ定ムル所ノ資格ニ應シ均シク文武官ニ任セラレ及其他ノ公務ニ就クコトヲ得ト規定シ而シテ裁判所構成法第二編ニ於テ

裁判所及檢事局ノ官吏ト題シ其吏員ニ採用セラルヘキモノヽ資格ニ關スル規定ヲ設ケタリ已ニ述ヘタルカ如ク判事檢事及ヒ書記ハ勅任奏任又ハ判任ノ官吏タリト雖モ廷丁ハ官吏ニアラス一種ノ雇員タルコトハ學說上異議ナキ所トス然レトモ執達吏カ官吏ナリヤ否ヤニ付テハ學說岐ルト雖モ刑法ニ所謂公務員タルコトハ爭ナキ所トス以下右各種ノ吏員ニ付キ其資格竝ニ任免等ニ關スル規定ノ大要ヲ說明スヘシ

第一章　判事及ヒ檢事

司法權ハ天皇ノ名ニ於テ法律ニ依リ裁判所之ヲ行フ(憲法第五十七條)而シテ裁判所ヲ組織シ司法權行使ノ任ニ當ル者ハ裁判官即チ判事ナリ憲法第五十八條ニ裁判官ハ法律ニ定メタル資格ヲ具フル者ヲ以テ之ニ任スト規定シ法律以外ニ其資格ヲ定ムルコトヲ許サス蓋シ判事ハ他ノ官吏ト異ナリ特ニ法律上ノ學識經驗ヲ有シ其品性ニ於テモ亦特ニ嚴正ナルヲ必要トスルカ故ナリ檢事ニ付テハ憲法上特ニ右ノ如キ規定ナシト雖モ其任タル公訴權ヲ行使シ裁判ノ執行ヲ指揮監督シ其他公益ノ代表者トシテ職務ヲ行フモノナルカ故ニ之亦判事ト同樣其學識經驗品性等ニ於テ完全ナラサルヘカラス之レ裁判所構成法ニ於テ判事及ヒ檢事ノ資格ニ付キ特ニ規定ヲ設ケタル所以ナリ

(一)　判事又ハ檢事ニ任セラルヽニハ第一回及第二回ノ競爭試驗ヲ經ルコトヲ要ス(構成法第五十七條)之ヲ原則トス

第一回試驗ハ學術試驗ニシテ第二回試驗ハ實務試驗ナリ此二回ノ試驗ヲ受ケ得ルニ必要ナル資格竝ニ此試驗ニ關スル細則ハ判事檢事登用試驗規則中ニ司法大臣之ヲ定ム(構成法第五十八條第一項)

明治二十四年五月司法省令第三號(二六年第一六號、二九年第五二號、三一年第一六號、三八年第三號第一三號)判事檢事登用試驗規則ニ依レハ其第一回受驗資格ヲ定ムルコト左ノ如シ

イ　成年以上ノ男子タルコト

ロ　左ニ記載シタル何レカ一ニ該當スルモノナルコト

甲　官立學校及專門學校令ニ依ル公立又ハ私立ノ學校(別科ヲ除ク)ニ於テ三學年以上法律學科ヲ修メ卒業證書ヲ有スル者

乙　司法大臣ニ於テ指定シタル公立又ハ私立ノ學校ニ於テ三學年以上法律學科ヲ修メ卒業證書ヲ有スル者(但シ明治四十年七月三十一日以後ノ

卒業者ヲ除ク)

丙　司法大臣ニ於テ相當ト認メタル外國ノ大學校又ハ之ト同等ナル學校ニ於テ法律學科ヲ修メ卒業證書ヲ有スル者

ハ　裁判所構成法第六十六條ニ該ラサル者ナルコト

第一回試驗ハ之ヲ豫備試驗ト本試驗トノ二トシ豫備試驗ハ本試驗ヲ受クルニ相當ナル學識ヲ有スルヤ否ヤヲ試驗スルヲ目的トシ論文及ヒ外國語(英、佛、獨語ノ中一ヲ選擇)ニ付キ之ヲ施行シ之レニ及第シタル者ニ非サレハ本試驗ヲ受クルヲ得ス本試驗ハ專門ノ學識ヲ試驗スルヲ目的トシ筆記、口述ノ二段ニ分チ筆記試驗ハ憲法、民法、商法、刑法、民事訴訟法、刑事訴訟法、行政法、國際公法、國際私法ノ九科目ニ就キ之ヲ施行シ之レニ及第シタル者ヲシテ口述試驗ヲ受クルヲ得シム口述試驗ハ民法、商法、刑法、民事訴訟法、刑事訴訟法ノ五科目中少クトモ三科目ニ就キ之ヲ施行シ以テ其及落ヲ決ス(若シ口述試驗ニ闕席スルモノトキハ試驗ハ成立タサル)

試驗委員長ハ及第者ノ氏名及其試驗ノ成績ヲ司法大臣ニ報告スヘク而シテ右第一回試驗ニ及第シタル者及ヒ帝國大學法科卒業生ニシテ司法官ノ任用ヲ望ム者ハ(帝國大學法科卒業生ハ第一回試驗ヲ受クルヲ必要トセス—構成法第六十五條第二項—之原則ニ對スル一例外ナリ)第二回試驗ヲ受クル前試補トシテ奏任待遇ヲ受ケ裁判所及檢事局ニ於テ三年間(明治四一年法律第十號ニ依リ一年半ニ短縮ス)實地修習ヲ爲スコトヲ要ス其修習ニ關スル細則モ亦判事檢事登用試驗規則中ニ之ヲ定ム(構成法第五十八條第二項第三項)

試驗規則ノ定ムル所ニ依レハ

一　試補ハ區裁判所及地方裁判所並ニ其檢事局ニ於テ一名若クハ數名ノ判事又ハ檢事ニ附屬シ事務ヲ修習スヘク其修習事務ノ直接ノ指揮監督ハ地方裁判所長之ヲ爲シ檢事ノ事務修習ヲ爲ストキハ檢事正之ヲ爲スモノトシ所長若クハ檢事正ハ毎年末ニ試補ノ職務上及職務外ノ行狀並ニ執務ニ關ル成績ノ證明書ヲ作リ控訴院長檢事長ヲ經由シテ之ヲ司法大臣ニ差出スモノトス

二　試補ハ修習目錄ヲ作リ其取扱ヒタル事件ヲ記載シ毎月直接指揮監督者ニ差出シ檢閲ヲ受クルモノトス

三　試補ノ疾病又ハ兵役履行ノ爲メ修習ヲ缺キタル日數一箇年ニ付キ二箇月以内ハ之ヲ修習日數ニ算入シ賜暇其他ノ原因ニ由リ修習ヲ缺キタル日數一箇年内ニ付キ一箇月以内ノトキ亦之ヲ修習日數ニ算入ス以上二ツノ場合併起スルトキハ通計シテ二箇月以内ノトキノミ之ヲ算入ス

四　試補職務上ノ義務ヲ怠リ又ハ職務上若ハ職務外ニ於テ其身分ニ適セサル行狀アルトキハ試補ノ直接指揮監督者之ヲ諭告シ其旨ヲ試補ノ履歷ニ記入ス

右ノ外尙一年以上修習ヲ爲シタル試補ハ其修習ヲ現ニ監督スル判事ノ命アルトキ區裁判所ニ於テ或ル司法事務ヲ取扱フコトヲ得ヘク豫審判事及地方裁判所ノ受命判事モ亦其附屬ノ試補ヲシテ自己ニ代ハリ或ル事務ヲ取扱ハシムルコトヲ得然レトモ左ノ事務ハ之ヲ取扱フコトヲ許サス

一　訴訟事件ト非訟事件トニ拘ラス裁判ヲ爲ス事

二　證據ヲ調フル事(但シ豫審判事又ハ地方裁判判ノ受命判事カ附屬試補ヲシテ爲サシムルハ妨ナシ)

三　登記ヲ爲ス事(裁判所構成法施行條例第十一條及ヒ裁判所構成法第九十二條ノ規定ニ依レハ試補モ臨時登記事務ヲ取扱ヒ得ルノ看ナキ能ハサルモ其資否ヲサルナリ)

又タ試補ハ特別ノ場合ニ區裁判所ノ檢事ヲ代理スルコトアリ(構成法第十八條第三項)臨時書記ノ事務ヲ取扱フコトアリ(同第九十二條)之亦一面ヨリ見レハ實地修習タルヲ免レス

試補ノ行狀罷免スルニ足レリト認ムルトキハ司法大臣ニ於テ何時ニテモ之ヲ罷免スルコトヲ得之レニ關スル細則モ亦試驗規則中ニ之ヲ定ムトハ構成法第五十九條ノ規定スルトコロナリ而シテ登用試驗規則第二十二條ニハ試補職務上若ハ職務外ノ行狀其職務ヲ執ルニ不適當ナルカ又ハ其修習ノ進步不十分ニシテ第二回試驗ニ及第ノ見込ナキトキハ直接指揮監督者ハ控訴院長檢事長ヲ經由シテ之ヲ司法大臣ニ報告スヘク司法大臣右ノ報告ヲ受ケタルトキハ試補ヲ免スルコトアルヘキ旨ヲ規定ス

以上說明スル所ニ從ヒ實地修習ヲ終ハリタルトキハ爰ニ第二回競爭試驗ヲ受ケ得ル資格ヲ生ス

第二回試驗ヲ受クルニハ直接指揮監督者ヲ經由シテ志願書ヲ司法大臣ニ差出スヘク志願書ニハ修習目錄ト陸海軍ノ現役ヲ終ヘ又ハ之ヲ免セラレタルコトヲ證明スル書面トヲ添フルコトヲ必要トス司法大臣ハ右志願書ヲ差出シタル試補ノ氏名ヲ試驗委員長ニ通知シ試驗ヲ行ハシム

第二回試驗ハ實務ニ習熟シタルヤ否ヤヲ試驗スルヲ以テ主タル目的トシ筆記口述ノ二段ニ分チ筆記試驗ハ試驗委員ヨリ付與セラレタル二件以上ノ訴訟記錄ニ

付キ事實及理由ヲ詳示シタル判決案ヲ答案トシテ試驗委員長ノ定メタル日時内ニ之ヲ差出スヘキモノトシ若シ之レニ違フトキハ試驗ハ成立タサルモノトス

試驗委員ハ右答案ヲ調査シ口述試驗ヲ爲スニ足ルヘキモノト認メタルトキハ口述試驗ノ爲メニ志願者ヲ呼出シ委員長ノ定ムル所ノ方法ニ從ヒ口述試驗ヲ行ヒ（口述試驗ニ闕席シタルトキハ試驗ハ成立タサルモノトス）タル後其及落ヲ決ス

試補右第二回試驗ニ落第シタルトキハ更ラニ六箇月間實地修習ヲ爲シタル後第二回試驗ヲ受クルヲ得ルモノトシ又タ試驗ノ成立タサリシ場合ニ於テ司法大臣ノ相當ト認ムル時期ニ於テ更ラニ試驗ヲ受クルヲ得ルモノトス

試驗委員長ハ第二回試驗及第者ノ氏名及其試驗ノ成績ヲ司法大臣ニ報告シ而シテ其及第者ハ判事又ハ檢事ニ任セラルヽヲ得ルモノトス（構成法第六十二條）

右ノ外試驗ヲ要セスシテ判事又ハ檢事ニ任セラルヽヲ得ル資格ヲ有スルモノアリ左ノ如シ（構成法第六十五條（之レ亦原則ニ對スル一例外ナリ））

一、三年以上帝國大學法科教授タリシ者

二、三年以上辯護士タリシ者

尙裁判所構成法施行當時ニ於ケル特別ノ制度ニ付テハ同法施行條例第十六條第十八條乃至第二十條參照

構成法第六十六條ニ該ル者ハ登用試驗ヲ受クル能ハサルヽミナラス受驗後ニ於テ同條所定ノ事項發生シタル者モ判事又ハ檢事タル資格ナキモノトス（試驗ヲ經テ任セラルヽコトヲ得ヘキ者ニ就テモ亦同シ）其事項左ノ如シ

一、重罪ヲ犯シタル者（舊刑法第七條、刑法施行法第二十九條）但シ國事犯ニシテ復權シタル者ハ此限ニ在ラス

二、定役ニ服スヘキ輕罪ヲ犯シタル者（舊刑法第三十條、刑法第八條第一號、刑法施行法第一條以下ノ懲役）

三、身代限ノ處分ヲ受ケ負債ノ義務ヲ免レサル者（家資分散法第五條參照）

新任ノ判事又ハ檢事ハ闕位アルマテ司法大臣ニ於テ之ヲ豫備判事又ハ豫備檢事トシテ勤務スルコトヲ命シ司法省又ハ區裁判所又ハ地方裁判所又ハ其裁判所ノ檢事局ニ用フルコトヲ得ヘク右裁判所又ハ其檢事局ニ用ヰラレタル豫備判事又ハ豫備檢事ハ判事又ハ檢事ニ差支アリ職務ニ從事スルヲ得ス且通常代理ノ規程ニ依リ難キコトアルトキ司法大臣ノ命ニ因リ右判事又ハ檢事ヲ代理ス但シ地方裁判所ニ付テハ構成法第三十二條ノ制限アリ

又タ司法大臣ハ區裁判所又ハ地方裁判所ノ判事又ハ其檢事局ノ檢事ニ一時闕位

アルハ間ハ豫備判事又ハ豫備檢事ヲ以テ之ヲ補充スルコトヲ得

區裁判所ノ判事地方裁判所ノ判事區裁判所檢事局ノ檢事又ハ地方裁判所檢事局ノ檢事ニ闕位アルトキハ新任ノ判事又ハ檢事（豫審判事及ヒ豫備檢事ヲ含ム）ヲ以テ之ヲ補職ス

（以上構成法第六十三條及第六十四條）

（二）判事ハ勅任又ハ奏任トシ其任官ヲ終身トス蓋シ判事ノ地位ヲ鞏固ニシ安シテ其職務ニ從事シ內外ノ干涉ヲ排斥シ公明正大ナル裁判ヲ爲スヲ得セシムル所以ナリ從テ其轉所轉官停職免職等ニ付テモ嚴ニ法律ノ定ムル所ニ則リ隨時之ヲ變更スルヲ許サヽルト同時ニ又一方ニ於テ其資格地位ニ伴フ嚴格ナル規定ヲ設ケタリ

第一 大審院長ハ勅任判事ノ中ヨリ　天皇之ヲ補シ各控訴院長及大審院ノ部長ハ司法大臣ノ上奏ニ因リ勅任判事ノ中ヨリ之ヲ補シ其他ノ判事ノ職ハ司法大臣之ヲ補ス（構成法第六十八條）

第二 （甲）控訴院判事ニ補セラルヘキ資格

一、五年以上判事タル者

二、五年以上檢事、帝國大學法科教授若ハ辯護士ニシテ判事ニ任セラレシ者

（乙）大審院判事ニ補セラルヘキ資格

一、十年以上判事タル者

二、十年以上檢事、帝國大學法科教授若ハ辯護士ニシテ判事ニ任セラレシ者

右（甲）（乙）ニ掲ケタル五年若ハ十年ノ年限ヲ計算スルニハ補職ノ時マテ各々右ニ記載シタル同一ノ職務ニノミ引續キ從事シタルヲ必要トセスシテ各種ノ職務期間ヲ通算シ五年又ハ十年ニ達スルヲ以テ足ル（以上構成法第六十九條乃至第七十條）

第三 判事ハ在職中左ノ諸件ヲ爲スコトヲ許サス（構成法第七十二條）

一、公然政治ニ關係スルコト

二、政黨ノ黨員又ハ政社ノ社員トナリ又ハ府縣郡市町村ノ議會ノ議員トナル事

三、俸給アル又ハ金錢ノ利益ヲ目的トスル公務ニ就ク事

四、商業ヲ營ミ又ハ其他ノ行政上ノ命令ヲ以テ禁シタル業務ヲ營ム事

右ノ外尙ホ官吏服務規律ヲ參照スルヲ要ス

第四 判事ノ轉官轉所停職免職又ハ減俸

憲法第五十八條ニ裁判官ハ刑法ノ宣告又ハ懲戒ノ處分ニ由ルノ外其職ヲ免セラルヽコトナシ懲戒ノ條規ハ法律ヲ以テ之ヲ定ムト規定シ裁判所構成法ハ單ニ免職ニ付テノミナラス轉官轉所停職又ハ減俸ニ付テモ亦刑法ノ宣告又ハ懲戒ノ處分ニ由ルニ非ラサレハ其判事ノ意ニ反シテ之ヲ爲ス能ハサルコトヲ規定ス(構成法第七十三條)但シ豫備判事タルトキ及補闕ノ必要ナル場合ニ於テ轉所ヲ命セラルヽハ此限ニ在ラス(同條)又タ懲戒取調又ハ刑事訴追ノ始若ハ其間ニ於テ他ノ法律ニ認メタル停職ハ右ト關係ナキ所ナリトス

刑法ノ宣告ニ由ル判事ノ失職ニ付テハ其說明ヲ省キ舊刑法第三十一條同第三十三條刑法施行法第三十六條第三十七條等ヲ參照スヘキコトヲ注意スルニ止メ以下懲戒法規ニ付キ其要領ヲ說明スヘシ

明治二十三年八月法律第六十八號判事懲戒法ハ憲法第五十八條竝ニ裁判所構成法第七十三條ノ規定ニ應スル爲メ制定セラレタル所ニシテ其第一條ニハ凡ソ判事ヲ懲戒スルハ左ノ場合ニ於テ懲戒裁判所ノ裁判ヲ以テスヘシ

一、職務上ノ義務ニ違背シ又ハ職務ヲ怠リタルトキ

二、官職上ノ威嚴又ハ信用ヲ失フヘキ所爲アリタルトキ

ト規定シ懲罰ノ種類ヲ第二條以下ニ於テ左ノ如ク定メ所犯ノ輕重ニ從ヒ其何レヲ科スヘキヤハ懲戒裁判所ノ自由裁量ニ任シタリ(尙ホ其科罰ヲ爲スニ當リテハ平生ノ行狀ヲモ斟酌シ得ルモノトス)

一、譴責

二、減俸——ハ一月以上一年以下ノ範圍內ニ於テ年俸月割額ノ三分ノ一以內ヲ減スルモノトス

三、轉所——ハ他ノ裁判所若ハ他ノ職ニ轉セシム但シ此場合ニ於テハ情狀ニ因リ減俸ヲ併科スルヲ得ルモノトス

四、停職——ハ三月以上一年以下職務ノ執行ヲ停止シ其停職中俸給ヲ給セサルモノトス

五、免職——ハ其言渡ヲ受ケタル者ハ現任ノ官ヲ失ヒ及ヒ恩給ヲ受クルノ權ヲモ失フモノトス

懲戒裁判所ノ組織權限裁判手續ニ付テハ判事懲戒法第八條以下第四十六條竝ニ同第五十四條以下第五十六條ヲ參照スヘシ

判事ハ左ノ場合ニ於テハ當然職務ヲ停止セラルヽモノトス

一、刑事裁判手續ニ於テ勾留セラレタルトキ
二、刑事裁判ニ依テ官職ノ喪失ニ該ル刑ノ言渡ヲ受ケタルトキ(其確定前)
三、懲戒裁判ニ依テ免職ノ言渡ヲ受ケタルトキ(其確定前)
四、刑事裁判ニ依テ拘留ノ刑ノ確定裁判ヲ受ケタルトキハ其刑期ノ終ルマテ

判事ハ懲戒裁判所ノ決定ニヨリ停職ヲ命セラルヽコトアリ

一、懲戒裁判所ハ懲戒事件カ轉所停職若ハ免職ニ該當スルモノト思料スルトキハ何時ニテモ檢事ノ意見ヲ聞キ職權ヲ以テ又ハ檢事ノ申立ニ因リ懲戒裁判手續結了ニ至ルマテ被告(懲戒ニ付セラレタル判事)ノ職務ヲ停止スルコトヲ決定スルヲ得

二、判事カ刑事訴追ヲ受ケタルトキハ其手續中何レノ場合ヲ問ハス懲戒裁判所ハ其手續結了ニ至ルマテ被告ノ職務ヲ停止スルコトヲ決定スルヲ得

右一及二ノ何レヲ問ハス職務停止ノ決定ニ對シテハ上訴ヲ爲スヲ許サス而シテ右決定ニ因リ又ハ當然職務ヲ停止セラレタル後其判事カ爲シタル職務上ノ行爲ハ之ヲ無效トス

以上法律ニ因ル當然ノ職務停止竝ニ決定ニ因ル職務停止ハ處罰ニ非ラサルヲ以テ其停職中ハ引續キ俸給ヲ給與セラルヽモノトス(構成法第七十三條第二項、第七十八條)

第五 判事ノ退職及休職、

判事身體若ハ精神ノ衰弱ニ因リ職務ヲ執ルコト能ハサルニ至リタルトキハ司法大臣ハ控訴院又ハ大審院ノ總會ノ決議ニ依リ之ニ退職ヲ命スルコトヲ得此場合ニ於テ退職判事ハ恩給法ノ定ムル所ニ因リ恩給ヲ受クルヲ得ルモノトス蓋シ退職ヲ命スルハ懲戒處分ニ因ル免職、停職トハ其性質ヲ同クセサルヲ以テナリ(官吏恩給法第十三條參照)(構成法第七十四條、第七十六條)

判事十五年以上奉職ノ者裁判所構成法實施後疾病其他ノ事項ニ因リ職務ヲ執ルコト能ハサルニ至リ休職ヲ願出タルトキハ司法大臣ハ休職ヲ命スルコトヲ得ヘク休職中ハ現俸ノ三分ノ一ヲ支給スルモノトス(判事休職及俸給支給制)

第六 判事ノ待命及ヒ闕勤

法律ヲ以テ裁判所ノ組織ヲ變更シ又ハ之ヲ廢シタル場合ニ於テ其判事ヲ補職スヘキ闕位ナキトキハ司法大臣ハ之ニ俸給ノ半額ヲ給シテ闕位ヲ待タシ

ムルコトヲ得(構成法第七十五條)

又タ判事病氣ノ爲執務セサルコト九十日ヲ踰ユル者及ヒ私事ノ故障ニ由リ執務セサルコト三十日ヲ踰ユル者ハ俸給ノ半額ヲ減ス但シ公務ノ爲傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ又ハ服忌ヲ受クル者及特旨ニ因リ賜暇休養スル者ハ此限ニ在ラス(構成法第七十六條及高等官官等俸給令第十八條)

第七 判事ノ官等俸給及進級ニ關スル規程ハ勅令ノ定ムル所ニ依ル(構成法第七十六條(判事檢事官等俸給令高等官官等俸給令))

(三) 檢事ハ勅任又ハ奏任トシ檢事總長及檢事長ノ職ハ司法大臣ノ上奏ニ因リ勅任檢事ノ中ヨリ之ヲ補シ其他ノ檢事ノ職ハ司法大臣之ヲ補ス但シ檢事ニ付テハ判事ト異リ控訴院檢事大審院檢事タルノ資格ニ關シテハ特別ノ制限ヲ設ケス又タ檢事ハ其上官ノ命令ニ從ヒ職務ヲ執行シ(構成法第八十二條)明治二十年七月勅令第三十九號官吏服務紀律ヲ遵守スルヲ必要トスルノ外特ニ判事ニ關スル構成法第七十二條ノ如キ明文ヲ設ケス

又タ檢事ハ司法行政ノ事務ヲ執行スル行政官ニシテ裁判官ニ非ラサルカ故ニ憲法第五十八條第二項ノ保障ヲ受ケスト雖モ普通文官トハ同一ニ看做ス可カラサルヲ以テ特ニ構成法第八十條ニ檢事ハ刑法ノ宣告又ハ懲戒ノ處分ニ因ルニ非サレハ其意ニ反シ之ヲ免職スルコトナシト規定シ法律ノ規定ヲ以テ其地位ヲ確保シ勅令ヲ以テ之ヲ動カスコト能ハサルモノナルコトヲ明ニスルト同時ニ構成法施行條例第二十一條ニ於テ構成法第七十四條、第七十五條ヲ檢事ニ適用シ、同第七十九條第二項ニ於テ同第七十七條ヲモ亦檢事ニ適用スルモノトシ以テ其地位ヲ確實ナラシメントス然レトモ同法第七十三條ノ規定ハ檢事ニ付キ適用セラレサルヲ以テ轉官轉所停職又ハ減俸ニ付テハ法律上ノ保障ナキモノトス從テ右特別ノ規定ニ抵觸セサル範圍内ニ於テハ檢事ノ進退ハ明治三十三年勅令第六十二號文官分限令及ヒ同年勅令第六十三號文官懲戒令ノ支配ヲ受クルモノトス

文官懲戒令ニ因レハ官吏ノ懲戒ヲ受クヘキ場合ハ判事懲戒法ニ定メタル所ト略同樣ニシテ

一、職務上ノ義務ニ違背シ又ハ職務ヲ怠リタルトキ

二、職務ノ内外ヲ問ハス官職上ノ威嚴又ハ信用ヲ失フヘキ所爲アリタルトキトシ只異ナル所ハ「職務ノ内外ヲ問ハス」ト附加シ稍其場合ヲ擴張シタルカ如キ觀アルノミ而シテ其懲戒罰ノ種類ハ左ノ三種トス

一、免官――此處分ヲ受ケタル者ハ其官職ヲ失ヒタル日ヨリ二年間官職ニ就クコトヲ得ス其情重キモノハ位記ヲ返上セシム

二、減俸――ハ一月以上一年以下ノ範圍内ニ於テ月割額若ハ月俸三分ノ一以下ヲ減ス

三、譴責

懲戒處分中免官及減俸ハ文官高等懲戒委員會ノ議決ヲ經タル後之ヲ爲スヘキモノトシ勅任官ハ免官及減俸ハ議決ヲ具シ内閣總理大臣之ヲ奏請シ奏任官ハ免官ハ議決ヲ具シ内閣總理大臣ヲ經テ本屬長官之ヲ奏請シ裁可ニ依リ之ヲ行ヒ奏任官ハ減俸ハ議決ニ依リ本屬長官直接ニ之ヲ行フモノトシ譴責ハ懲戒委員會ノ議決ヲ要セス本屬長官ニ於テ任意之ヲ行フモノトス

(四) 試補ハ奏任官ノ待遇トス而シテ構成法第五十九條ニ依リ司法大臣ニ於テ何時ニテモ之ヲ罷免スルヲ得ルノミナラス文官懲戒令第三十四條ノ規定ニ依リ高等官ニ準シ同令ノ支配ヲ受クルモノトス

(五) 判事檢事ノ進級ニ付テハ判事檢事官等俸給令第九條ニ左ノ一箇條アルノミ曰ク

判事檢事各職ノ進級ハ拔擢ヲ以テ之ヲ行フ

第二章　裁判所書記

書記ハ司法大臣之ヲ任シ及ヒ之ヲ補ス即チ判任タリ書記長ハ奏任トシ其職ハ司法大臣之ヲ補ス(構成法第八十八條)

書記ニ任セラルヽニハ勅令ノ定ムル所ニ依リ試驗ヲ經ルコトヲ必要トシ其試驗ヲ受クルニ必要ナル資格竝ニ試驗ニ關スル細則及試驗ヲ經タル後ニ爲スヘキ修習ニ關ル細則ハ裁判所書記登用試驗規則中ニ司法大臣之ヲ定ム(同法第八十九條)

明治二十四年司法省令第四號裁判所書記登用試驗規則

明治三十二年勅令第六十一號文官任用令

裁判所書記ニモ判事檢事ト同シク定員アリ從テ書記ニ任セラレタル者ニシテ其補職ノ闕位ナキ場合アリ即チ之ヲ豫備書記ニ補シ臨時必要ナル場合ニ於テ勤務ヲ命セラルヽモノトス

書記長ハ奏任タルカ故ニ一般高等文官ノ資格ヲ具有スル者ヲ以テ之ニ任スルヲ原則トスレトモ明治三十年勅令第二百二十二號裁判所書記長特別任用制ヲ以テ

特別任用ノ途ヲ開ケリ

免職懲戒等ニ關シテハ一般文官ニ關スルト差異ナシ

第三章　執達吏

執達吏ハ司法大臣之ヲ任シ及之ヲ補スルヲ原則トシ司法大臣ハ控訴院長ニ其管轄區域内ノ裁判所ノ執達吏ヲ任補スル權ヲ委任スルヲ得ルモノトシ執達吏ニ任セラルヽニ必要ナル資格並ニ試驗ニ關スル規則ハ司法大臣之ヲ定ム蓋シ執達吏ハ法律ニ依リ司法機關ノ一トシテ重要ナル職務ヲ執行スル者ニシテ官吏タル資格ヲ有スルヤ否ヤニ付テハ議論ナキニ非ラサルモ明治二十三年法律第五十一號執達吏規則ヲ以テ其職務執行ニ關スル嚴格ナル規定ヲ設ケ同規則ニ依ルノ外ハ總テ一般官吏ノ例ニ依ルヘキ者ト爲シタルヲ以テ從テ執達吏タル者ノ資格ニ關シテモ亦一定ノ準則ナカルヘカラサルナリ(構成法第九十五條)

明治二十三年司法省令第二號ニ依レハ執達吏ニ任セラルヽニハ左ノ資格ヲ必要トス

第一　年齡滿二十五歲以上ナルコト

第二　陸海軍ノ現役ヲ終ヘ又ハ之ヲ免セラレタルコト

第三　身體健全ナルコト

第四　家計ノ整理シタルコト

第五　品行方正ナルコト

第六　試驗ニ及第シタルコト又ハ左ノ一ニ該當スル者ナルコト

一　官立府縣立中學校又ハ之ト同等ナル官立府縣立學校、司法省舊法學校、帝國大學ノ監督ヲ受ケタル舊私立法學校又ハ文部大臣ノ認可ヲ經タル學則ニ依リ法律學ヲ敎授スル私立學校ノ卒業證書ヲ有スル者

二　裁判所書記ノ登用試驗ニ及第シタル者

三　判任官以上ノ職ヲ現ニ奉シ又ハ曾テ奉シタル者

四　陸軍下士ニシテ文官奉職ヲ請願スルコトヲ得ル者

第七　重罪ヲ犯シタルコトナキ者但シ國事犯ニシテ復權シタル者ハ此限ニ在ラス

第八　定役ニ服スヘキ輕罪ヲ犯シタルコトナキ者

第九　身代限ノ處分ヲ受ケ(家資分散ヲ含ム)負債ノ義務ヲ免レサル者ニ非ラサ

ルコト

第十　懲戒ノ處分ニ依リ免職セラレタル者ニ非ラサルコト

執達吏タラントスル者ハ其任命前少クトモ六ケ月間ハ區裁判所ニ於テ主トシテ執達吏ノ職務ヲ修習シ傍ラ書記ノ職務ヲ修習スルヲ要ス但シ區裁判所書記ハ職務修習ヲ要セス直チニ執達吏ニ任セラルヽヲ得

試驗ヲ要スルモノハ右修習後筆記口述二樣ノ試驗ヲ受ケサルヘカラス試驗科目左ノ如シ

一　訴訟法中書類送達及執行ニ關スル規程

二　執達吏ニ關スル諸規則

三　算術

四　讀書筆寫

試驗ニ及第シタル者其他任用ノ資格アル者ニ付キ控訴院長ニ於テ執達吏ノ缺員アルヲ待テ之ヲ任補ス

執達吏ニ任セラレタル者ハ任補ノ日ヨリ三十日內ニ保證金ヲ管轄地方裁判所ニ納ムルヲ要ス若シ期間內ニ保證金ヲ差出サヽルトキハ職務ヲ罷免スルモノトス

右保證金納付後裁判所ハ執達吏ニ官印ヲ交付シ執達吏ハ官印交付ヲ受ケタル後始メテ其職務ヲ執行スルヲ得ルモノトス

執達吏ハ自ラ其職務ヲ執行スルヲ本則トスレトモ疾病其他ノ事項ニ依リ（事件多キニ過ギ自ラ處理スル能ハサルカ如キ）差支アルトキハ自己ノ責任ヲ以テ執達吏以外ノ者ニ其職務ノ執行ヲ委任スルヲ得ヘク又執達吏差支アル場合ニ於テ監督判事ニ於テ執達吏以外ノ者ヲシテ執行ヲ爲サシムルコトアリ又執達吏ヲ置カサル區裁判所ニ於テハ書記自ラ其職務ヲ行ヒ若ハ自己ノ責任ヲ以テ他ノ者ヲシテ執行セシムルコトヲ得但シ此等執達吏ニ代ルヘキ者ノ資格ニ付テハ一定ノ制限アリ執達吏規則第十一條第十三條第二十三條等ヲ參照スヘシ

第四章　廷丁

廷丁ニ付テハ第一編第二章第一節ニ於テ說明シタル外特ニ述フヘキ必要事項ナキヲ以テ之ヲ略ス

第三編　司法事務ノ取扱

第一章　開廷

開廷トハ民事刑事ノ訴訟ヲ審理判決スル爲メニ訟廷ヲ開クノ謂ニシテ即チ判事檢事書記出廷シテ審判ヲ爲スヲ謂フ

尚ホ當事者（民事ニ付テハ原被兩告、刑事ニ付テハ被告）又ハ其代理人（民事ニ付テハ通常辯護士但シ區裁判所ノ事件ニハ例外アリ）辯護人（民事ニ付テハ當事者ノ代理人トシテ出廷スル爲メニ辯護スル利益ノ爲メニ辯護スル者ナリ刑事ニ付テハ辯護士ニ非ラサル者モ特ニ許可ヲ受ケテ辯護人タルコトヲ得ルコトアリ）モ亦出廷ス又檢事ハ民事事件ニ付テハ人事訴訟中ノ特別ノ事件ノ外開廷ニ立會フコトナシ

開廷ハ裁判所又ハ支部ニ於テ之ヲ爲スヲ原則トシ司法大臣ニ於テ事情ニ因リ必要ナリト認ムルトキハ區裁判所ヲシテ其管轄區域内ノ一定ノ場所ニ於テ職ヲ行ハシムルコトヲ得（構成法第百三條）之レ開廷ノ場所ヲ指定シタルモノナリ

開廷中訴訟審問ノ上席トナリ及ヒ之ヲ指揮スル者ハ合議裁判所ニ於テハ開廷ヲ爲シタル裁判長ニ屬シ區裁判所ニ於テハ開廷ヲ爲シタル單獨判事ニ屬ス裁判長ニ屬スル權ハ裁判上一人ニテ執務スル判事ニモ亦屬スルモノトス（構成法第百四條）

裁判長ト部長トヲ混同スヘカラス部長カ裁判長タルヲ通常トスレトモ部長差支アルトキハ上席ノ陪席判事裁判長トナリ開廷シ訴訟審問ノ指揮ヲ爲スモノトス裁判上一人ニテ執務スル判事トハ豫審判事、受命判事、受託判事ヲ謂フ

指揮權ノ作用ニ付テハ構成法ニ規定スル外民事、刑事訴訟法ノ規定ヲ參照スヘシ（民事訴訟法第百九條、第百十二條、第百十三條、刑事訴訟法第百九十三條、第百九十四條等）

開廷ハ之ヲ公開スルヲ原則トス蓋シ裁判ノ公平ヲ維持セントスルニ在リ憲法第五十九條ニ裁判ノ對審判決ハ之ヲ公開ス但シ安寧秩序又ハ風俗ヲ害スル虞アルトキハ法律ニ依リ又ハ裁判所ノ決議ヲ以テ對審ノ公開ヲ停ムルコトヲ得ト宣言ス即チ審判ノ公開ハ單ニ法律ノ命スル所ニ非ラスシテ憲法上ノ要件ナリ

公開トハ訟廷ノ出入ヲ自由ニシ公衆ヲシテ隨意ニ審判ヲ傍聽スルヲ得セシムルヲ謂フ

憲法ハ對審ノ公開ヲ宣言スルト同時ニ安寧秩序又ハ風俗ヲ害スル虞アル場合ニ於テハ

「法律ニ依リ」

二　裁判所ノ決議ヲ以テ

對審ノ公開ヲ停止スルコトヲ許セリ法律ニ依リ公開セサル場合ハ別ニ説明ノ要ナシ裁判所ノ決議ヲ以テ公開ヲ停止スル場合ニ付テハ構成法第百五條ニ左ノ規定ヲ設ケタリ即チ同條ハ

裁判所ニ於テ對審ノ公開ヲ停ムルノ決議ヲ爲シタルトキハ其ノ決議ハ其理由ト共ニ公衆ヲ退カシムル前之ヲ言渡ス此場合ニ於テ裁判所ノ判決ヲ言渡ストキハ再ヒ公衆ヲ入廷セシムヘシト規定セリ

對審ノ公開ヲ停ムルニハ審問ニ係ル事件ノ對審カ(甲)安寧秩序ヲ害スル虞アルカ(乙)風俗ヲ害スル虞アルトキニ限リ其事件ヲ審判スル裁判所(第三意義ニ於ケル裁判所ニ於テハ審判ニ干與スル定數ノ判事ノ部ヲ指ス)ノ決議ヲ必要トス而シテ其決議ハ他ノ事件ニハ效力ヲ及ホサヽルモノトス又タ區裁判所ニ於テハ單獨判事自ラノ意思決定ニ因リ公開ヲ停止スルコトヲ得(民事訴訟法第二十九條第二項第五號、刑事訴訟法第二百八條第六號參照)公開停止ハ對審ノミニ限ル判決ハ言渡ハ必ス公開セサルヘカラス

公開ヲ停止シタルトキト雖モ裁判長カ特ニ入廷セシムルヲ可ナリト認ムル者ニ對シテハ裁判長ニ於テ之カ入廷ノ特許ヲ與フルコトヲ得(構成法第百五條)即チ訴訟當事者ノ親族又ハ利害關係人ノ如キ者ハ公開停止中ト雖モ之ヲ入廷セシムルヲ妨ケサルナリ

審問ノ上席及指揮ノ權カ裁判長ニ屬スル結果トシテ開廷中ノ秩序ヲ維持スル權モ亦裁判長(區裁判所ニ於テハ單獨判事)ニ屬ス(構成法第百八條)

開廷中ノ秩序維持權ノ作用ハ限定セラレサルカ故ニ一々爰ニ列擧スルノ必要ナシト雖モ構成法ハ秩序維持ノ爲メ特別ニ以下説明スル諸種ノ權能ヲ裁判長ニ認メタリ

第一　裁判長ハ婦女兒童及ヒ相當ナル衣服ヲ着セサル者ヲ法廷ヨリ退カシムルコトヲ得但シ其理由ハ之ヲ其退廷ヲ命シタル時ニ審判中ノ訴訟記錄ニ記入シ置カシム(構成法第百七條)

此權ハ之ヲ一面ヨリ見レハ法廷秩序維持ノ爲メニ認メタル者ナレトモ之ヲ他ノ一面ヨリ見ルトキハ公開停止ト同樣ノ精神ニ出ツル者ナリ即チ婦女兒童ノ如キモノヲシテ或種事件ヲ傍聽セシムルハ公ノ秩序善良ノ風俗ニ背反スルノ虞ナキ能ハサルヲ以テ之ニ退廷ヲ命スルヲ得セシムルナリ

第二　裁判長ハ審問ヲ妨クル者又ハ不當ノ行狀ヲ爲ス者ヲ法廷ヨリ退カシム

ルノ權ヲ有ス

右違犯者ノ行狀ニ因リ之ヲ勾引シ閉廷ノトキマテ之ヲ勾留スルノ必要アリト認ムルトキハ裁判長ハ之ヲ命令スルノ權ヲ有ス(構成法第百九條)

右裁判長カ勾留ヲ命シタル場合ニ於テハ其閉廷ノ時裁判所ハ之ヲ釋放スルコトヲ命シ又ハ裁判所ハ判決ヲ以テ五圓以下ノ罰金又ハ五日以内ノ勾留ニ處スルコトヲ得ヘク其處罰ニ對シテハ上告ヲ許スノミニシテ控訴ヲ許サヽルノミナラス違犯者ノ所爲カ犯罪ヲ構成スルトキハ別ニ之レニ對シテ刑事上ノ訴追ヲ爲スヲ妨ケス

若シ右ノ違犯者カ當事者、證人又ハ鑑定人ナルトキハ

(一)裁判所ハ閉廷ヲ待タスシテ即時ニ違犯者ヲ處罰スルコトヲ得ヘク

(二)違犯者原告ナルトキハ裁判所ハ右處罰ヲ爲シタルトキト雖モ仍ホ其本人宥恕ヲ請フカ又ハ恭順ヲ表シテ不敬ノ罪ヲ謝スルマテ其審問ヲ中止スルコトヲ得

第三　裁判長ハ不當ノ言語ヲ用ヰル辯護士ニ對シ其事件ニ付キ引續キ陳述スルノ權ヲ行フコトヲ禁スルコトヲ得(構成法第百十條右禁止ヲ命シタルトキト雖モ其行狀(不當ノ言語ヲ用ヰタルコト)カ懲戒上ノ訴追ヲ爲スヘキモノニ該ルトキハ其訴追ヲ爲スノ妨トナルコトナシ

右第二及第三ニ於テ與ヘラレタル權ハ豫審判事、受命判事又ハ法律上其職務ヲ行フ試補モ亦之ヲ行フコトヲ得(構成法第百十二條)レトモ之レニ對シテハ二十四時間内ニ異議ノ申立ヲ爲スコトヲ得ヘク其申立ハ右ノ權ヲ行ヒタル判事又ハ試補ニ申出ツルモノトシ豫審判事又ハ豫審判事ノ命ヲ受ケタル試補カ爲シタル命令ニ對スル異議ハ其豫審判事ノ屬スル裁判所ノ刑事部若ハ刑事支部ニ於テ裁判シ受命判事又ハ受命判事ノ命ヲ受ケタル試補カ爲シタル命令ニ對スル異議ハ其受命判事ヲ命シタル裁判所ニ於テ裁判スルモノトス

以上第二及第三ニ於テ與ヘラレタル權ヲ行ヒタルトキハ(豫審判事、受命判事又ハ試補ノ行ヒタルヲモ合ム)其訴訟記錄ニ其旨ヲ記入シ且ツ其理由ヲモ記載セシムヘク尚ホ其處分ヲ受ケタル者ノ行爲カ犯罪ニ該リ又ハ懲戒上罰スヘキモノナルトキハ詳細ニ之ヲ記入シ裁判長ハ其事件ヲ更ニ處分スル權アル官廳ニ報告スヘキモノトス(構成法第百十三條)

判事、檢事及裁判所書記ハ公開シタル法廷ニ於テハ一定ノ制服ヲ著スヘク其開廷

ニ於テ審問ニ參與スル辯護士モ亦一定ノ職服ヲ著スルコトヲ必要トス(構成法第百十四條)

明治二十三年勅令第二百六十號ヲ以テ判事、檢事、裁判所書記及執達吏制服ヲ定メ

明治二十六年司法省令第四號ヲ以テ辯護士ノ職服ヲ定ム

第二章　裁判所ノ用語

裁判所ニ於テハ日本語ヲ用ウヘキモノトシ、訴訟當事者證人又ハ鑑定人ノ中日本語ニ通セサル者アルトキハ訴訟法又ハ特別法ニ通事ヲ用ヰルコトヲ要スル場合ニ之ヲ用ウ(構成法第百十五條)

民事訴訟法第百二十五條ニハ裁判所ハ辯論ニ與カル者日本語ニ通セサルトキハ通事ヲ立會ハシムト規定シ

同第百二十六條ニハ裁判所ハ辯論ニ與カル者聾者又ハ啞者ナルトキ之ニ文字ヲ以テ理會セシムルコトヲ得サル場合ニ限リ通事ヲ立會ハシムルコトヲ得ト規定ス

刑事訴訟法ニ於テハ其第百條ニ被告人又ハ對質人聾ナルトキハ書面ヲ以テ問ヒ啞ナルトキハ書面ヲ以テ答ヘシム若シ聾者啞者文字ヲ知ラサルトキハ通事ヲ命スヘシ被告人又ハ對質人國語ニ通セサルトキ亦同シ、第百二十九條ニ第百條第百一條ノ規定ハ證人ニ付テモ之ヲ適用ス、第百九十七條ニ被告人聾者啞者又ハ國語ニ通セサル者ナルトキハ第百條第百一條ノ規定ニ從フト規定ス

即チ之ヲ要スルニ通事ヲ用ウルハ訴訟ノ審理ニ必要ナル場合ニ於テスル者ニシテ檢事カ公訴事實ヲ陳述スルトキ裁判所カ決定又ハ判決ヲ言渡ストキノ如キハ通事ヲ立會ハシムルノ必要ナキモノト信ス

通事ノ任命及使用竝ニ訴訟手續上其行フヘキ職務ニ關ル規則ハ司法大臣之ヲ定ム(構成法第百十六條)

通事ノ得難キ場合ニ於テ其通事ヲ要スヘキ言語ニ通スル書記アルトキハ裁判長之ヲ通事トシテ用ヰルコトヲ得(構成法第百十七條)外國人カ當事者タル訴訟ニ於テ其訴訟ニ關係ヲ有スル者竝ニ其訴訟ノ審問ニ參與スル官吏カ共ニ或ル外國語ニ通スル場合ニ於テ裁判長便利ナリト認ムルトキハ其外國語ヲ以テ口頭審問ヲ爲スコトヲ得但シ審問ノ公正記錄ハ日本語ヲ以テ作成スルヲ要ス(構成法第百十

第三章　裁判ノ評議及言渡

判事ハ民事刑事ノ事件ヲ審判スルニ付キ他ノ拘束ヲ受クルコトナシ從テ單獨判事ニ在リテハ專ラ自己ノ意見ニ依テ其事件ヲ裁判スヘシト雖モ合議裁判所ニ在リテハ三人五人若シクハ七人ノ判事ヲ以テ裁判所ヲ構成スルモノナルカ故ニ各判事單獨ノ意見ヲ以テ裁判スル能ハス即チ合議ヲ經テ裁判スヘキモノトス之レ合議裁判所ノ名アル所以ナリ(構成法第百十九條)

裁判所ノ合議即チ判事ノ評議ハ之ヲ公行セス其合議ヲ開キ且之ヲ整理スルモノハ裁判長ニシテ合議ノ際各判事ノ意見ヲ述フル順序ハ官等最モ低キ者ヲ始トシ裁判長ハ最後ニ其意見ヲ述フルモノトス而シテ若シ官等相同キ者アルトキハ年少者ヲ始トシ受命ノ事件ニ付テハ受命判事ヲ始メトス

合議ハ過半數ノ意見ニ依テ決スヘキモノトシ合議ノ結果ハ即チ裁判トシテ言渡サレ外部ニ發表セラルヽモノトス然レトモ合議ハ之ヲ公行セサルカ故ニ其評議ノ顚末竝ニ各判事カ如何ナル意見ヲ有シタリヤ又タ總員一致ニテ決シタリヤ反對者アリシヤ等即チ各判事ノ意見竝ニ其意見ノ多少ノ數ニ付テハ嚴ニ秘密ヲ守ルコトヲ必要トス蓋シ當事者其他ノ者ヲシテ合議ノ内容ヲ知リ得シムルトキハ或ハ裁判ノ威信ヲ害スルコトアリ或ハ判事カ忌憚ナク事件ニ付キ其意見ヲ陳述スル能ハサルノ虞ナシト謂フヲ得サレハナリ

裁判長ハ豫備判事及試補ニ合議ノ傍聽ヲ許スコトヲ得之レ蓋シ職務修習ノ爲メニスルニ過サルナリ從テ傍聽ヲ許サレタル豫備判事及ヒ試補ハ合議ノ數ニ加ハルコトヲ得サルハ勿論評議ノ秘密ヲ嚴守スヘキハ當然ナリ

要スルニ合議ハ秘密ニシテ其事件ヲ審判スル定數ノ判事及特ニ傍聽ヲ許サレタル豫備判事及ヒ試補以外ノ者ハ檢事、書記其他何人ト雖モ合議席ニ立入ルコトヲ許サヽルナリ

合議ハ判事ノ意見ノ過半數ニ依テ決スヘキコトハ已ニ一言セリ若シ其意見カ三說又ハ三說以上ニ分レ其說何レモ過半數ニ至ラサルトキハ金額ニ付テハ過半數ニ至ルマテ最多額ノ意見ヨリ順次寡額ニ合算シテ之ヲ決シ刑事ニ付テハ過半數ニ至ルマテ被告人ニ取リテ不利ナル意見ヨリ順次利益ナル意見ニ合算シテ決スルモノトス(以上構成法第百二十一條乃至第百二十三條)

審判ニ干與スル各判事ハ何等ノ事由アリト雖モ其裁判スヘキ問題ニ付キ自己ノ意見ヲ陳述スルコトヲ拒ムコトヲ得ス(構成法第百二十四條)但シ刑事訴訟法ノ定ムル所ニ從ヒ回避シテ其事件ノ干與ヲ離脱スルハ此限ニ在ラス(刑事訴訟法第四十四條)

四日以上引續キ審理ヲ爲ス必要アリト認メタル刑事事件ノ審問ニ付テハ裁判所長ニ於テ定數ノ判事ノ外補充判事一人ヲ命シテ其事件ニ立會ハシムルコトヲ得而シテ此補充判事ハ其審問中或判事カ病病其他ノ事由ニ因リ引續キ之ニ參與スルヲ得サル場合ニ其判事ニ代ハリ審問及裁判ヲ完結スルモノトス(構成法第百二十條、刑事訴訟法第二百九條參照)蓋シ各判事ハ事件審理判決ノ終始引續キ同一ノ者タルヲ要シ若シ列席判事中差支ヲ生シ他ノ判事之レニ代リタルトキハ公判手續ハ始ヨリ更ニ新タニセサルヘカラサルカ故ニ豫メ補充判事ヲ命シテ其事件ニ立會ハシメ置キ審理更新ノ煩ヲ避クルト同時ニ所謂口頭辯論主義竝ニ直接審理主義ニ背戻スル勿ランコトヲ期シタルナリ

裁判所構成法第三編司法事務ノ取扱第三章裁判ノ評議及宣渡

裁判所ノ公判審理ハ判決ノ言渡ヲ以テ終了スルモノニシテ判決ハ言渡ニ因リ其效力ヲ生スルモノトス刑事訴訟法第二百條第二項ニハ判決ノ言渡ハ判決主文ノ朗讀ニ因リ之ヲ爲ス其判決ノ理由ハ判決ノ言渡ト同時ニ之ヲ朗讀シ又ハ口頭ニテ其要領ヲ告ク可シト規定シ民事訴訟法第二百三十四條ニハ判決ノ言渡ハ判決主文ノ朗讀ニ因リ之ヲ爲ス其理由ヲ言渡スコトヲ至當ト認ムルトキハ判決ノ言渡ト同時ニスコトヲ得裁判ノ理由ヲ言渡スコトヲ至當ト認ムルトキハ判決ノ言渡ト同時ニ其理由ヲ朗讀シ又ハ口頭ニテ其理由ヲ告クヘシト規定ス其何レニ徴スルモ判決ハ其言渡前ニ已ニ存在スルモノニシテ言渡ニ因リテ外部ニ對シテ其效力ヲ生スルモノト解スルヲ至當トス換言スレハ判決ハ審理ニ干與シタル定數ノ判事ノ評議決定ニ因リテ存在シ之ヲ判決書ノ主文トシテ記載シ之ヲ朗讀シテ言渡スニ因リテ效力ヲ生スルモノトス故ニ判決ト判決言渡トノ間ニハ自ラ區別アリト謂フヲ得ヘク「判決ハ評議ノ結果ニ依リ成立シ其言渡ハ已ニ成立シタル判決ヲ外面ニ標識スルニ過キス從テ判決ノ基本タル審理ニ臨席セサル判事カ判決ノ言渡ヲ爲スハ違法ニ非ラス(大審院判決錄四輯六卷三十七ページ)ト論斷スルヲ妨ケス即チ一事件ヲ審判スルハ定數ノ同一ノ判事タルコトヲ必要トスレトモ其言渡ハ必スシモ之レト同一ノ判事タルコトヲ必要トセサルナリ

此點反對論アリ民事訴訟法第二百三十二條ニハ判決ハ其基本タル口頭辯論ニ

臨席シタル判事ニ限リ之ヲ爲スト規定シ刑事訴訟法モ亦之ト同一趣旨ヲ認ムルモノナリ而シテ判決ハ言渡ニ因リ成立シ其言渡以前ニハ判決ナルモノナキカ故ニ判決ノ言渡モ亦審理ニ干與シタル同一ノ判事ニ於テ爲サヽルヘカラスト論ス其可否ハ爰ニ詳論セス只我裁判所ノ實際ノ取扱ニ於テハ前掲大審院判決例ノ認ムル所ニ從ヒ必スシモ同一ノ判事タルヲ要セストセリ從テ構成法第百十九條ニハ定數ノ判事之ヲ評議シ之ヲ言渡スト規定セリト雖モ評議ヲ爲ス判事ト言渡ヲ爲ス判事トハ必スシモ同一ナルヲ必要トスルモノニアラスト解セサルヘカラサルナリ

判決ノ言渡ハ刑事訴訟法第二百四條第一項ニハ「辯論ヲ終リタル後即日又ハ次ノ開廷日ニ之ヲ爲スヘシ」ト規定シ民事訴訟法第二百三十三條ニハ「口頭辯論ノ終結スル期日又ハ直チニ指定スル期日ニ於テ之ヲ言渡ス但シ其期日ハ七日ヲ過クルコトヲ得ス」ト規定スレトモ判例竝ニ學者ノ說明スル所ニ依レハ之レ單ニ裁判所ヲシテ遵守セシム可キ規定ニ過キス即チ單ニ訓示的效力ヲ有スル規定タルニ止リ此規定ニ違反シテ言渡ヲ爲スモ判決ノ效力ニ何等ノ影響ヲ及ホスコトナシトセリ

第四章　裁判所及檢事局ノ事務章程

構成法第百二十六條ニハ裁判所及檢事局ノ標準ト爲スヘキ規則ハ司法大臣之ヲ定ム控訴院長及檢事長ハ前項ノ規則ニ依リ各自管轄區域內ノ裁判所及檢事局ニ對シテ事務ノ一般ノ取扱ニ關シ成ヘク統一ヲ旨トシ殊ニ裁判所及檢事局ノ開廳時間及開廷ノ時日ニ付訓令ヲ發ス大審院ハ自ラ其事務章程ヲ定ム但シ之ヲ實施スル前司法大臣ノ認可ヲ受クト規定ス即チ大審院ハ自ラ其事務規定ヲ設ケ唯タ其實施前ニ司法大臣ノ認可ヲ受クルヲ以テ足リ其他ノ裁判所ニ對スル事務規定ハ司法大臣ニ於テ其標準ト爲スヘキ大體ノ規定ヲ設ケ各控訴院長及檢事長ハ右司法大臣所定ノ規則ニ基キ各自其管轄區域內ノ裁判所及檢事局ニ於テ取リ扱フヘキ事務規定ヲ設クルモノトス今其事務規定ノ詳細ニ至テハ一々爰ニ說明スルヲ得ス

第五章　司法年度及休暇

司法年度ハ毎年一月一日ニ始マリ十二月三十一日ニ終ルモノトシ(構成法第百二

十六條)――構成法第二十二條等ニヨリ定ムル事務分配部ノ組立等ハ其一司法年度内變更セサルヲ原則トス

一司法年度中七月十一日ヨリ九月十日マテヲ裁判所ノ休暇トス休暇中ハ民事訴訟事件ニ付キ左ニ掲クルモノヽ外ハ已ニ裁判所ニ繫屬スル事件ノ審判ヲ中止スヘク且ツ新ナル訴訟ノ審判ニ着手セサルモノトス(構成法第百二十七條第百二十八條)但シ刑事訴訟事件ニ付テハ此限ニアラス

休暇中審判スヘキ民事事件左ノ如シ

一、爲替手形若ハ約束手形其他ノ流通證書ニ關ル請求

二、船舶又ハ運送賃又ハ積荷ニ對スル請求

三、財産差押事件

四、住所其他ノ建物又ハ其ノ或部分ノ受取明渡使用占據若ハ修繕ニ關リ又ハ賃借人ノ家具若ハ所持品ヲ賃貸人ノ差押ヘタルコトニ關リ賃貸人ト賃借人トノ間ニ起リタル訴訟

五、養料ノ請求

六、保證ヲ出サシムルノ請求

七、取掛リタル建築ノ繼續ニ關ル事件

八、右ノ外區裁判所ノ判事ニ於テ又ハ民事訴訟法ノ定ムル所ニ從ヒ休暇部若ハ休暇部長ニ於テ直チニ着手スヘキ緊急ノモノト認メタル請求若ハ事件

九、民事訴訟法ニ依リ略式ヲ以テ取扱フコトヲ得ヘキ訴訟

以上ノ外非訟事件、判決執行、破産事件ノ如キハ休暇中ト雖モ之ヲ停止スルコトナク又タ刑事訴訟ニ付テハ片時ト雖モ之ヲ停止スルハ公安ヲ保持スル所以ノ道ニアラサルカ故ニ一切之ヲ停止スルコトナシ(構成法第百二十九條)

尙ホ休暇中中止スヘキ事件ニ關シテハ民事訴訟法第百六十八條並ニ第百六十六條ヲ參照スヘシ

休暇中合議裁判所ニ於テハ平常設ケラレタル部ヲ閉チ事務取扱ノ爲メニ休暇部ト稱スル一若ハ二以上ノ部ヲ設クヘク而シテ其部ノ組立ハ休暇ノ始マル前裁判所長之ヲ定ムルモノトシ(構成法第百三十一條)單獨裁判所ニ於テハ其判事適宜休暇事務ノ取扱ヲ定メ二人以上ノ判事ヲ置キタル單獨裁判所ニ在リテハ監督判事之ヲ定ムルモノトス(構成法第百三十條)或部ニ於テ着手シタル事務ニシテ司法年

度ノ終ニ臨ミ未タ終結ニ至ラサルモノハ次ノ司法年度ニ於ケル刑事部又ハ民事部ニ於テ事務分配ノ定ムル所ニ從ヒ之ヲ引續キ取扱フヘク休暇ノ始メニ臨ミ未タ終結ニ至ラサルモノハ休暇部ニ於テ又休暇ノ終ニ臨ミ未タ終結ニ至ラサルモノハ休暇部ニ屬シタル事務ノ引繼ヲ受クヘキ平常ノ刑事部又ハ民事部ニ於テ夫々引續キ之ヲ取扱フヘキモノトス然レトモ之レカ爲メニ其事務取扱ノ任ニ當ルヘキ判事ニ異動ヲ生シ訴訟法上其他不便ヲ感スル場合少シトセサルカ故ニ裁判所長ハ特ニ如斯キ場合ニ於テハ特定ノ事務ニ付キテハ假リニ前後同一判事ヲシテ部ヲ組立テシメ引續キ之ヲ終了スヘキコトヲ命スルヲ得ルモノトス

豫審判事モ亦之レト同樣ノ必要上司法年度ノ終リニ於テ未タ終了セサル事務ニ付テハ其同一判事ヲシテ引續キ次年度ニ於テ其事務ヲ結了スヘキコトヲ裁判所長ニ於テ命スルヲ得ルモノトス(以上構成法第二十四條並ニ第百三十條第二項)

第六章　法律上ノ共助

裁判所ハ訴訟法又ハ特別法ノ定ムル所ニ依リ互ニ法律上ノ輔助ヲ爲スヘク法律上ノ輔助ハ別ニ法律ニ定メタル場合ノ外ハ所要ノ事務ヲ取扱フヘキ地ノ區裁判所ニ於テ之ヲ爲スヲ原則トス(構成法第百三十一條)檢事局モ亦各自ノ管轄區域內ニ於テ取扱フヘキ事務ニ付互ニ法律上ノ輔助ヲ爲スヘク裁判所書記課モ亦其權內ノ事件又ハ其配下ノ執達吏ノ權內ノ事件ニ付キ互ニ法律上ノ輔助ヲ爲スヘキモノトス(構成法第百三十二條第百三十三條)

民事及刑事訴訟法ニ於ケル法律上輔助ノ規定ハ未タ完全ナリト云フ能ハス即チ證人訊問臨檢家宅搜索等ニ付キ數箇條ノ規定ヲ設クルノミニシテ各裁判所ノ行動ハ土地ノ管轄ニヨリテ制限セラレ他ノ管轄裁判所ノ輔助ヲ受クルニ非ラサレハ完全ニ且ツ迅速ニ其司法權ノ運用ヲ完フスル能ハサルノミナラス尙外國裁判所トノ間ニ於テモ亦裁判上共助ノ必要ヲ感スルコト少シトセス今左ニ法律上共助ニ關スル二三ノ特別法ヲ示シテ參考ノ資トセン

一　明治三十三年法律第八十三號裁判所及臺灣總督府法院共助法並ニ同年勅令第百七十四號

二　明治四十年法律第五十二號並ニ同年勅令第二百九十二號

三　明治三十八年法律第六十三號外國裁判所ノ囑託ニ因ル共助法

四　明治四十二年法律第三十六號裁判所臺灣總督府法院統監府法務院及理

事廳ノ判決執行ニ關スル件

第四編　司法行政ノ職務及監督

本編ニ於テハ司法事務自體ニアラサル司法行政ノ職務竝ニ其監督ヲ規定スルニ止リ裁判上執務スル判事ノ裁判權ニハ何等影響ヲ及ホスコトナク又決シテ之ヲ制限スルコトナキモノトス裁判事務ハ裁判官獨立ニ之ヲ執行シ何人ト雖モ之ニ干渉スルヲ得ルモノニ非ラサルナリ(構成法第百四十三條)

檢事ハ裁判官ニ非ラス法律上一定ノ職權ヲ有スルカ故ニ其獨立ニ爲シタル事項ハ外部ニ對シ效力ヲ生スルハ勿論ナリト雖モ其內部關係ニ　テハ其執務上一切上官ノ命ニ從フヘキモノトス

司法行政ノ最高機關ヲ司法大臣トシ合議裁判所長(大審院長控訴院長地方裁判所長)區裁判所ノ判事又ハ監督判事、檢事總長檢事長及ヒ檢事正ハ司法大臣カ由テ以テ其司法行政ヲ行フカ爲メニ設ラレタル隸屬ノ機關トス(構成法第百三十四條)

而シテ右各種ノ機關ヲシテ圓滿ニ司法行政ヲ行ハシムルカ爲メニハ其間ニ一定ノ監督ノ順序ヲ定メ置カサルヘカラス即チ(構成法第百三十五條)

第一、司法大臣――ハ最高ノ司法行政機關ナルカ故ニ全國總テノ各裁判所(大審院及各控訴院ヲ含ム)及檢事局ヲ監督シ

第二、大審院長――ハ大審院ニ於ケル司法行政ノミヲ監督シ其他ニ及ハス

第三、各控訴院長――ハ各其控訴院及ヒ其控訴院ノ管轄區域(土地ノ管轄)內ノ下級裁判所全體ヲ監督シ

第四、各地方裁判所長――ハ各其裁判所(其支部及其管轄區域內ノ區裁判所全體ヲ監督シ

第五、各區裁判所ノ判事(判事一人ノミヲ置キタルトキ)又ハ監督判事――ハ各其裁判所ノ所屬ノ書記及執達吏ヲ監督シ

區裁判所ノ監督判事ハ其裁判所ノ他ノ判事ヲ監督スル權能ヲ有セサルコトヲ注意スヘシ

又明治二十一年勅令第六十四號明治二十六年司法省令第十號竝ニ構成法第十一條ノ規定ニ依レハ各地方裁判所管內ニハ區裁判所出張所ヲ設ケ區裁判所判事ヲシテ登記事務ヲ取扱ハシムルヲ得ヘク尙判事ニ差支アルト

キハ裁判所書記ヲシテ其事務ヲ取扱ハシムルコトヲ得而シテ登記事務ノ監督權ハ地方裁判所長直接ニ之ヲ行フモノニシテ區裁判所判事ハ其權ヲ有セサルカ故ニ區裁判所ノ書記カ出張所ニ於テ登記事務ヲ行フ場合ニ於テハ其書記ニ對スル登記事務ニ關スル監督ハ地方裁判所長之ヲ行ヒ區裁判所ノ判事又ハ監督判事ハ其書記ノ登記事務ニ關係ナキ司法行政上ノ監督ヲ爲シ得ルニ止ルモノトス

第六、 檢事總長――ハ其大審院ニ於ケル檢事局及全國ノ下級裁判所ニ於ケル檢事局一切ヲ監督シ

第七、 檢事長――ハ各其控訴院ニ於ケル檢事局及其控訴院管轄區域內ノ各裁判所ニ於ケル檢事局ヲ監督シ

第八、 檢事正――ハ各其地方裁判所ニ於ケル檢事局及其地方裁判所管轄區域內ノ各裁判所(支部及ヒ區裁判所)ニ於ケル檢事局ヲ監督ス

區裁判所檢事局ニ數人ノ檢事ヲ置キタルトキ其一人ヲ上席檢事ト稱スルコト從來ノ慣行ナリト雖モ所謂上席檢事ハ法律上當然ニ其他ノ檢事ニ對スル監督權ヲ有スルモノニハアラス

監督權ノ內容ハ一々之ヲ爰ニ列擧スルヲ得ス構成法第百三十六條ニハ特ニ左ノ事項モ亦監督權ノ內容タルコトヲ明カニス

第一、 官吏不適當又ハ不充分ニ取扱ヒタル事務ニ付キ其注意ヲ促シ竝ニ適當ニ其事務ヲ取扱フコトヲ訓令スル事

第二、 官吏ノ職務上ト否トニ拘ラス其地位ニ不相應ナル行狀ニ付諭告スルコト但シ此諭告ヲ爲ス前其官吏ヲシテ辯明ヲ爲スノ機會ヲ與フルヲ必要トス

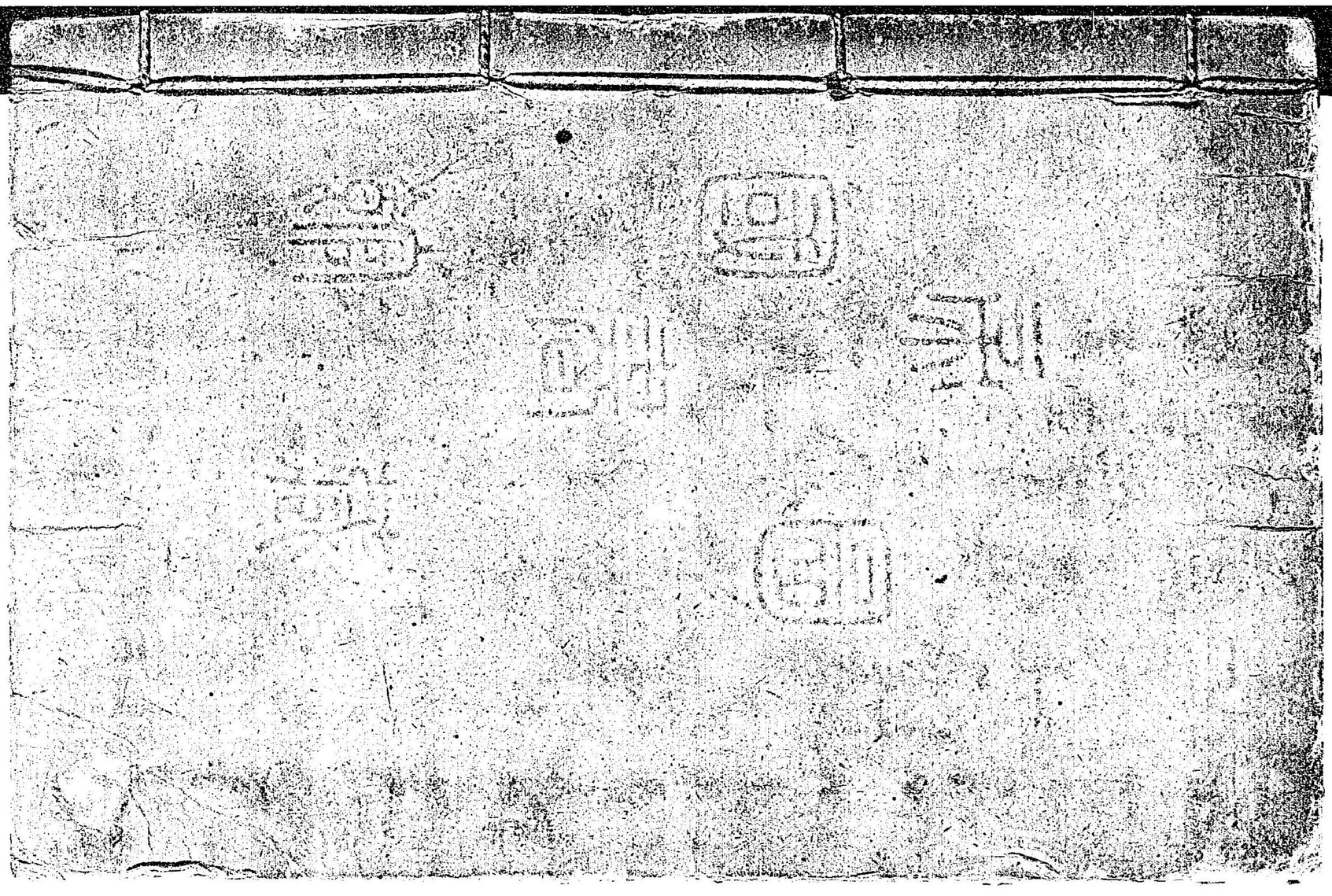
尙監督權ノ作用トシテ(一)司法大臣又ハ監督權アル判事又ハ檢事ハ裁判所又ハ檢事局ニ對シ法律上ノ事項竝ニ司法行政ニ關スル事項ニ付キ意見ヲ述フルコトヲ要求スルヲ得ヘク其要求ヲ受ケタル者ハ之ヲ拒ムヲ得サルモノトシ(構成法第百四十條)(二)司法事務ノ取扱ニ對シ抗告ヲ爲ス者アリタル場合ニ於テハ其事務取扱者ヲ監督スル者ニ於テ其職務竝ニ監督權ニ依リ之ヲ處分スルヲ得ルモノトス(構成法第百四十條)

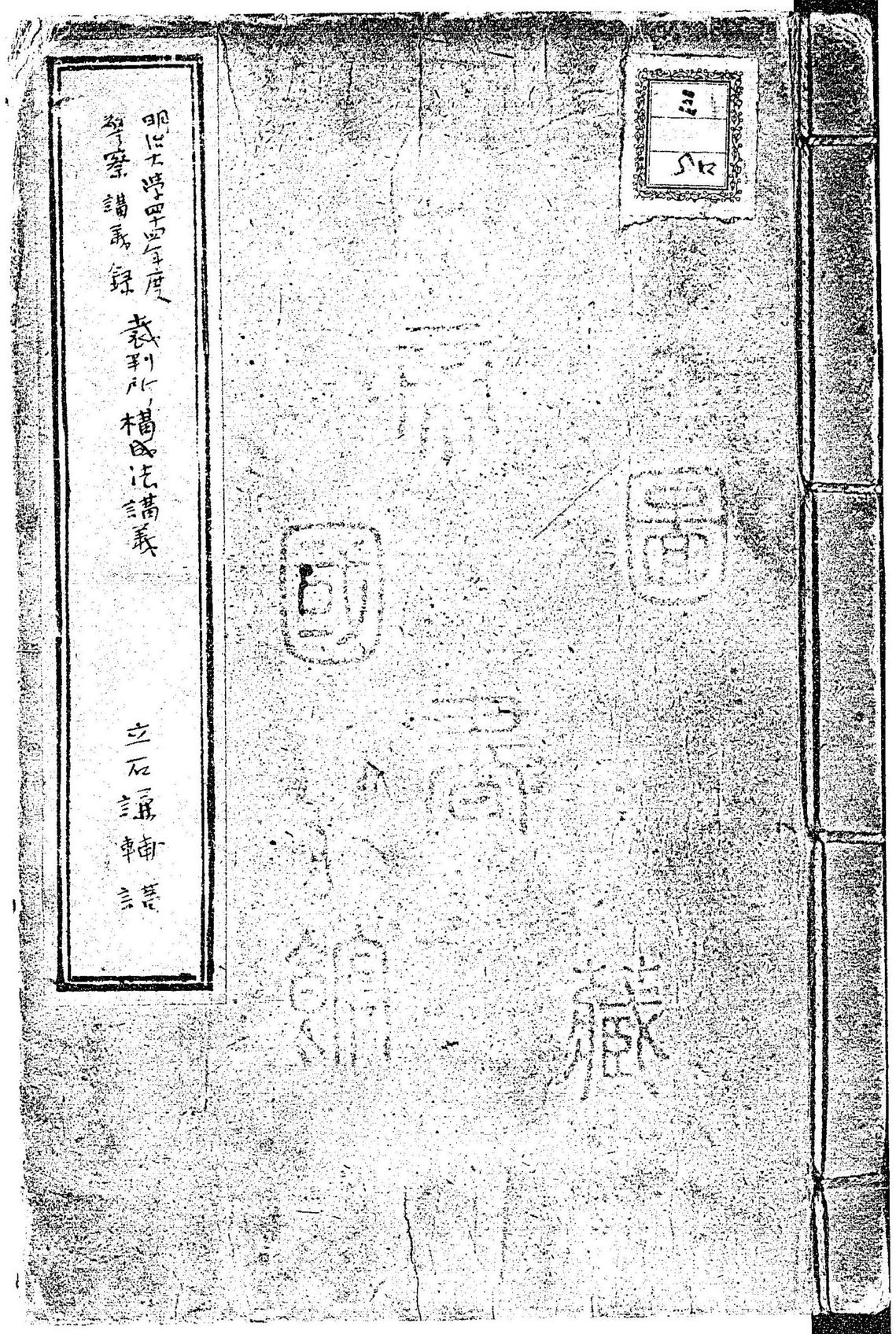
構成法第百三十八條ニハ裁判所若ハ檢事局ノ官吏ニ對シ懲戒ノ訴追ヲ爲シ得ルコトヲ規定ス之レ當然ノコトニシテ別ニ說明ヲ要セス

又第百三十九條ニハ判事又ハ檢事ノ官吏タル資格其他ノ資格ヲ以テ爲シタル事ニ對シ起リタル請求ニ付キ其請求ヲ滿足セシムル爲メニ司法行政ノ職務又ハ監督權ヲ執行スルヲ得サル旨ヲ規定ス之レ亦蛇足タルニ過キス職務並ニ監督權ハ公平ニ之ヲ行フヘク之ヲ亂用スル能ハサルハ法文ヲ俟タスシテ明ナリ

監督ヲ受クル者ハ各裁判所又ハ檢事局ノ吏員ナリ然ルニ構成法第十八條第八十四條ニ依レハ其吏員ニ非ラスシテ檢事ノ事務ヲ取扱フコトアリ(其他ノ警察官憲(林務官)又ハ兵將校下士)又タ判事ニシテ檢事々務ヲ取扱フコトアリ如斯場合ニ於テハ各其事務所屬ノ監督官ノ監督ヲ受クヘキモノトス(構成法第百三十七條)

裁判所構成法 畢





036426-000-0

ミ-5ロ

裁判所構成法講義

立石　謙輔／述

〔M44?〕

BBR-0079